

裏長峰遺跡

平成4年度県営圃場整備事業恩前
地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1995.3

長野県原村教育委員会

うら なが みね い せき
裏 長 峰 遺 跡

平成 4 年度県営圃場整備事業恩前
地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1995.3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が裏長峰遺跡

序

八ヶ岳西麓に位置する原村では、農業の合理化と生産性向上を目的とした県営圃場整備事業が大規模に進められております。

一方、八ヶ岳西南麓は遺跡の宝庫として全国的に著名で古くから注目を集めました。

このたび報告書を刊行することになりました裏長峰遺跡は、たまたま平成4年度県営圃場整備事業恩前地区の予定地にかかり、諏訪地方事務所の委託と国・県から補助金交付を受けた原村教育委員会が緊急発掘調査を実施したものであります。

発掘調査では、平安時代の集落址であることが明らかになりました。発見した竪穴住居址は22軒で、八稜鏡をはじめ数多い資料が出土しております。

このような貴重な文化遺産を目のあたりにし、感動を覚えるとともに後世に伝えていく責任を強く感じるものであります。

このたびの発掘調査にあたり、諏訪地方事務所土地改良課各位、柏木区および実行委員会各位、地元地権者の方々のご理解・ご協力、長野県教育委員会のご指導をはじめ発掘にかかる多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では、炎天下でご苦労された作業員の皆様により、失われていく貴重な文化財を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申しあげます。

平成7年3月

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

例　　言

- 1 本報告は「平成4年度県営圃場整備事業恩前地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柏木に所在する裏長峰遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけた原村教育委員会が、平成4年5月1日から9月7日にかけて実施した。整理作業は、平成5年1月4日から平成7年2月28日まで行なった。
- 3 遺構・遺物の実測とトレース、写真撮影は平出一治・平林とし美が行なった。
- 4 執筆は、平出が行なった。
- 5 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、14の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、丸山敏一郎・市沢英利・小平和夫・武藤雄六・小林公明・樋口誠司の諸氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目 次

序	
例 言	
目 次	
I 発掘調査の経過	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 調査組織	2
3 発掘調査の経過	2
II 遺跡の位置と環境	5
1 遺跡の位置と自然環境	5
2 遺跡の歴史的環境	8
III 調査方法	9
1 調査区の設定と調査の方法	9
2 土層	9
3 調査の概要	13
IV 遺構と遺物	14
1 旧石器時代の遺物	14
(1) 遺構に伴わない遺物	14
2 縄文時代の遺構と遺物	14
(1) 小竪穴	14
(2) 遺構に伴わない遺物	15
3 平安時代の遺構と遺物	15
(1) 竪穴住居址	15
(2) 小竪穴	50
(3) 遺構に伴わない遺物	51
4 時代不詳の小竪穴と集石	53
(1) 小竪穴	53
(2) 集石	56
5 近・現代の遺構と遺物	56
(1) タメ址	56
(2) 遺構に伴わない遺物	56

図 版 目 次

第1図 原村域の地形断面模式図（宮川一裏長峰一赤岳ライン）	1
第2図 裏長峰遺跡の位置と付近の遺跡	6
第3図 発掘調査区域図・地形図	10
第4図 遺構配置図	11
第5図 第1号竪穴住居址実測図	16
第6図 第1～4号竪穴住居址出土土器実測図	17
第7図 第2号竪穴住居址実測図	19
第8図 第3号竪穴住居址実測図	20
第9図 第4号竪穴住居址実測図	22
第10図 第5号竪穴住居址実測図	23
第11図 第5号竪穴住居址出土土器実測図	24
第12図 第2・5・11・16・21号竪穴住居址出土鉄製品、 第21号竪穴住居址出土八稜鏡実測図	25
第13図 第6号竪穴住居址実測図	27
第14図 第6・8～11号竪穴住居址出土土器実測図	28
第15図 第7号竪穴住居址実測図	29
第16図 第8号竪穴住居址実測図	30
第17図 第9・10号竪穴住居址実測図	32
第18図 第11号竪穴住居址実測図	34
第19図 第12号竪穴住居址実測図	35
第20図 第12～14・16号竪穴住居址出土土器実測図	36
第21図 第13号竪穴住居址実測図	38
第22図 第14号竪穴住居址実測図	39
第23図 第15号竪穴住居址実測図	40
第24図 第16号竪穴住居址実測図	41
第25図 第17号竪穴住居址実測図	42
第26図 第17～21号竪穴住居址、小竪穴1、遺構外出土土器実測図	43

第27図 第18号竪穴住居址実測図	44
第28図 第19号竪穴住居址実測図	45
第29図 第20号竪穴住居址実測図	46
第30図 第21号竪穴住居址実測図	48
第31図 第22号竪穴住居址実測図	49
第32図 小竪穴1~11実測図	52
第33図 小竪穴12~16、集石1実測図	54

表 目 次

表1 表長峰遺跡と付近の遺跡一覧	7
表2 竪穴住居址・小竪穴・集石一覧	58
表3 青銅製品・鉄製品・鉄滓一覧表	60

報告書抄録

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

農村地域はどこでも同じであろうが、後継者がいないことから高齢化は進むばかりである。だからと云って労力が少なくなることはなく、機械化を望む声は強くなるばかりである。その機械力を増すためには、農地や農道の整備が必要になる。それが原村における圃場整備事業であり、平成3年度に着工された「県営圃場整備事業恩前地区」内には、裏長峰遺跡（原村遺跡番号14）・程久保遺跡（原村遺跡番号15）・恩膳西遺跡（原村遺跡番号23）が所在していることから、それらの保護については平成2年8月8日に長野県教育委員会文化課、原村役場農林課、原村教育委員会の3者で協議を行った。

しかし、3遺跡ともその規模や性格などが不明瞭なものばかりであり、適切な結論を導き出すことはできなかった。その後も諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課・地元関係者と協議を重ねた中で、遺跡の範囲確認調査の話は浮上するが、県営圃場整備事業茅野市丸山地区に先立つ長峰遺跡（原村遺跡番号13）の緊急発掘調査を実施していることで、調査体制を整えることはできないし時間的にも余裕はなく、表面採集という限られた調査を試みることにした。

村教育委員会は、平成3年11月7・8・19日に県営圃場整備事業予定地内の踏査を実施したが、やはり満足のいく結果を得ることはできないまま、それらの資料を基に平成3年12月16日に原村役場および現地で行なわれた長野県教育委員会の「平成4年度農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財保護協議」で協議された。出席者は長野県教育委員会文化課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者である。

協議では、遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいが、前記したように農業者の強い要望があり「記録保存やむなき」との考えに落ち着き。発掘調査の時期については一日も早い機械化を望む声が強く、平成4年度の調査を要望されるが、調査員および作業員が少ないので調査体制を整えることができないため平成4・5年度の2年間にわたり



第1図 原村域の地形断面模式図（宮川—裏長峰—赤岳ライン）

緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることができた。

原村教育委員会は、裏長峰遺跡の緊急発掘調査を平成4年度に計画し、国庫及び県費から発掘調査補助金交付をうけ、また、諒訪地方事務所から緊急発掘調査の委託をうけ、平成4年5月1日から9月7日にわたって緊急発掘調査を実施した。

2 調査組織

裏長峰遺跡発掘調査団名簿

團 長 平林 太尾（原村教育委員会教育長）

調査担当者 平出 一治

調査員 伊藤 証 平林とし美

調査参加者	発掘作業（平成4年度）	平林 途雄	清水 豊一	清水 太助
	松沢喜代次	五味 聰次	菊池 利光	真道 龍造
	徳谷 真樹	守屋喜利治	守屋 菊一	小林 主税
	牛山いね志	小林 ミサ	林 けさ江	林 はなゑ
	清水としみ	中村きみゑ	宮坂とし子	藤原智恵子
	小平 章子	清水 米美	清水つるゑ	五味富貴枝
	整理作業（平成6年度）	津金喜美子	守屋 好	白鳥すみ江
	（順不同）		鎌倉あき子	坂本ちづる

事務局 原村教育委員会事務局

平成4年度	小池平八郎（教育次長）	大口美代子（庶務係長）	宮坂 道彦
伊藤 佳江	平出 一治	伊藤 証	
平成5年度	平林今朝二（教育次長）	大口美代子（庶務係長）	宮坂 道彦
伊藤 佳江	五味 一郎（主任）	平出一治	平林とし美
平成6年度	平林今朝二（教育次長）	大口美代子（庶務係長）	
宮坂道彦（主任）	伊藤 佳江	五味 一郎（文化財係長）	平出 一治
平林とし美			

3 発掘調査の経過

平成4年5月1日 発掘準備をはじめる。

17日 発掘機材の搬入を行う。

- 19日 テントを設営し、グリッドの設定をはじめる。引き続き遺物の散布状況と遺構の埋没状況の確認を目的としたグリッド発掘を手掘りではじめる。
- 21日 グリッド発掘で平安時代の住居址の埋没を確認する。便宜上第1号竪穴住居址と呼ぶことにする。表土が浅いため手掘りで検出作業を続ける。
- 25日 遺跡の広がりがほんとは把握できたため重機による表土剥ぎをはじめる。
- 26日 住居址の検出作業を人力ではじめる。2号竪穴住居址（DU-43グリッド）から鉄製の鍬先の優品が出土する。
- 27日 引き続き遺構の検出作業を続ける。4号竪穴住居址の検出写真撮影を行い、精査をはじめる。
- 6月1日 4号竪穴住居址の全景写真の撮影を行う。
- 2日 5号・6号竪穴住居址の検出写真の撮影を行い、精査をはじめる。
- 3日 7号・8号竪穴住居址の検出写真の撮影を行う。
- 4日 11号・14号・22号竪穴住居址（検出時点では小竪穴1）の検出写真の撮影を行う。
- 5日 小竪穴2・3の検出写真の撮影を行う。
- 6日 重複する9号と10号竪穴住居址、12号竪穴住居址、小竪穴4の検出写真の撮影を行う。
- 9日 13号竪穴住居址の検出写真の撮影を行う。5号竪穴住居址から刀子が出土する。
- 11日 15号竪穴住居址の検出写真の撮影を行う。
- 13日 小竪穴5・6の検出写真の撮影、小竪穴2の埋土の観察を行う。
- 16日 小竪穴7の検出写真、14号・15号竪穴住居址・小竪穴2の全景写真の撮影、12号竪穴住居址の埋土の観察を行う。
- 18日 1号・16号竪穴住居址、小竪穴8の検出写真の撮影を行う。16号竪穴住居址から刀子が出土する。
- 19日 1号竪穴竪穴住居址の検出写真の撮影を行う。
- 20日 17号竪穴住居址の検出写真の撮影を行う。今日から遺構の実測をはじめる。
- 23日 2号竪穴住居址の検出写真の撮影を行う。
- 7月1日 7号竪穴住居址の全景写真の撮影を行う。
- 3日 5号竪穴住居址の廐躰から刀子が出土する。
- 6日 4号竪穴住居址の全景写真の撮影を行う。5号竪穴竪穴住居址のピットから耳皿が出土する。
- 8日 6号竪穴住居址と重複していた小竪穴8の検出写真の撮影を行う。

- 9日 18号竪穴住居址、小竪穴9・11の検出写真の撮影を行う。
- 10日 小規模な集石1を検出する。
- 13日 8号竪穴住居址の埋土の観察を行う。
- 15日 小竪穴12の検出写真の撮影を行う。
- 16日 11号竪穴住居址、小竪穴5～7の埋土の観察を行う。
- 20日 22号竪穴住居址の全景写真の撮影、小竪穴3の埋土の観察を行う。5号竪穴住居址の竈跡から鉄鎌が出土する。
- 21日 小竪穴13の検出写真の撮影を行う。11号竪穴住居址からふいごの羽口が出土する。
- 23日 8号竪穴住居址、小竪穴3・5～8・11の全景写真の撮影、小竪穴12の埋土の観察を行う。
- 24日 小竪穴4・9の埋土の観察を行う。
- 25日 11号竪穴住居址、小竪穴9の全景写真の撮影、10号竪穴住居址の埋土の観察を行う。
- 27日 12号竪穴住居址、小竪穴9の全景写真の撮影を行う。
- 28日 小竪穴12・15の全景写真の撮影、小竪穴14の埋土の観察を行う。
- 29日 14号竪穴住居址の竈の精査と焼土の観察、小竪穴6・7の全景写真の撮影を行う。
- 31日 5号竪穴住居址の全景写真の撮影を行う。
- 8月1日 12号竪穴住居址の全景写真の撮影を行う。
- 6日 重複する9号と10号竪穴住居址の全景写真の撮影、11号・12号竪穴住居址の竈の精査と焼土の観察を行う。
- 7日 19号・20号竪穴住居址の検出写真の撮影、16号竪穴住居址の埋土の観察を行う。
- 10日 21号竪穴住居址の検出写真の撮影、8号竪穴住居址の全景写真の撮影・竈の精査と焼土の観察を行う。
- 12日 20号竪穴住居址の検出写真の撮影
- 17日 16号竪穴住居址の全景写真の撮影、9号・19号・22号竪穴住居址の竈の精査と焼土の観察を行う。
- 20日 4号・10号竪穴住居址の竈の精査と焼土の観察を行う。
- 21日 2号・17号竪穴住居址の全景写真の撮影を行う。
- 22日 1号・7号竪穴住居址の全景写真の撮影を行う。3号竪穴住居址ビッ

トから刀子が出土する。

24日 小豎穴14全景写真の撮影、1号新・1号旧・7号・8号・17号豎穴住居址の竪の精査と焼土の観察を行う。

25日 8号豎穴住居址の全景写真の撮影を行う。3号豎穴住居址から刀子が出土する。

26日 11号・16号豎穴住居址の全景写真の撮影を行う。

27日 14号豎穴住居址の全景写真の撮影を行う。20号豎穴住居址から刀子が出土する。

28日 小豎穴1の検出写真撮影、重複する9号・10号豎穴住居址の全景写真の撮影を行う。

31日 22号豎穴住居址の全景写真の撮影、5号・13号・20号（新・旧）豎穴住居址の竪の精査と焼土の観察、小豎穴1の埋土の観察を行う。21号豎穴住居址ピットから八稜鏡が出土する。

9月1日 20号・21号豎穴住居址の全景写真の撮影を行う。

2日 3号豎穴住居址の全景写真の撮影を行う。

3日 旧石器時代のナイフ形石器の出土した地点付近の調査をはじめる。3号・16号・21号豎穴住居址の竪の精査と焼土の観察行う。

4日 6号豎穴住居址の竪の精査と焼土の観察行い、片付けをはじめる。

6日 遺跡見学会を開く。

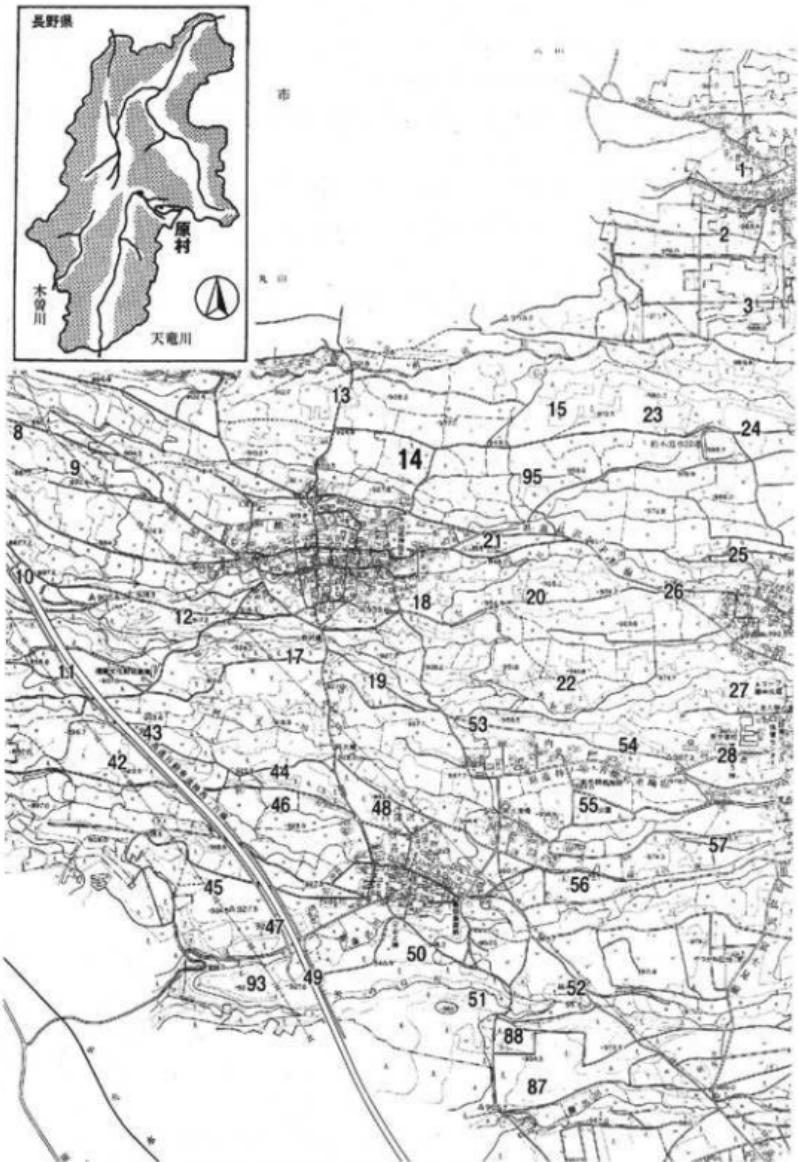
7日 3号豎穴住居址の竪の精査と焼土の観察行い、今日で調査は終了する。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と自然環境

裏長峰遺跡（原村遺跡番号14）は、柏木区の北方、長野県諏訪郡原村7408番地2ほかに位置する。このあたりは八ヶ岳西麓に位置し、東西に細長く発達した大小様々な尾根がみられる。その一つである裏沢川と前沢川にはさまれた高い尾根は、前沢川側に片寄っており裏沢川側は緩やかな平坦地が広がっている。その平坦地の中にも小高い尾根がみられるが、その中の一つが本遺跡であり標高は935m前後を計る。

地目は普通畠と果樹園（梅）であるが、付近一帯は水田で遺跡範囲が畑地である。低い尾根ではあるが人力での開田は困難であったためか水田の中に遺跡が取り残された状態で



第2図 裏長峰遺跡の位置と付近の遺跡 (1 : 20,000)

表1 裏長峰遺跡と付近の遺跡一覧

○は遺物発見 ○は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文				弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中							
1	家裏	○			○	○				○			昭和59年度発掘調査
2	大久保前									○			昭和54年消滅
3	向尾根	○	○			○							昭和54年度発掘調査 消滅
8	比丘尼原北			○									
9	比丘尼原南				○								
10	柏木南	○			○	○							昭和50年度発掘調査
11	阿久澤	○	○	○	○	○				○			昭和50~54・平成5年度発掘調査
12	前沢		○	○	○	○				○			昭和55・61年度発掘調査
13	長峰		○		○	○		○		○			平成3年度発掘調査 消滅
14	裏長峰	○		○		○			○	○			平成4年度発掘調査 消滅
15	程久保原		○		○	○			○	○			平成4・5年度発掘調査 消滅
17	白ヶ原		○		○	○			○				昭和53年度発掘調査
18	前尾根西				○	○							
19	南平根				○	○							
20	前尾根				○	○							
21	上居沢尾根				○	○							
22	清水				○	○							
23	恩勝西	○		○	○	○			○				昭和62・平成5・6年度発掘調査
24	恩勝根		○		○	○			○				昭和62年度詳細分布調査
25	裏尾根				○								
26	家原下				○								
27	園廬沢宮				○								
28	居沢尾根				○	○							
42	中阿久山					○							昭和50~53・56・平成6年度発掘調査
43	原広原日向	○				○							昭和51年度発掘調査
44	原尻				○								
45	宿				○	○							昭和58年度発掘調査
46	ヲシキ木				○	○							平成5・6年度発掘調査 消滅
47	檜の木				○	○							昭和51年度発掘調査
48	大石	○		○	○	○							昭和50・平成4・5年度発掘調査
49	山の神原				○	○							昭和54年度発掘調査
50	姥ヶ原				○	○							昭和63・平成元年度発掘調査
51	水掛平				○								
52	雁頭沢					○							昭和54・57・63・平成4・5年度発掘調査
53	宮ノ下				○	○							昭和57・58年度発掘調査
54	中尾根				○	○							
55	家前尾根				○								
56	久保地尾根				○								
57	下原山南				○								平成6年度発掘調査
87	下原山北				○	○							昭和63・平成元年度発掘調査
88	大石西				○	○							昭和63・平成元年度発掘調査
93	土井平				○	○							平成3年度発掘調査
95													平成4年度発掘調査 消滅

あった。地味は黒色土の堆積は薄く礫が散乱していて良くない。

遺跡の保存状態は、表土が薄く地山のローム層まで耕作が達しており良くない。擾乱の歴史は深いものが多く長芋が生産されたようである。ロームを粉碎し耕作土にしている個所もある。

付近の平安時代の遺跡に目を向けてみると、平成3年度に県営圃場整備事業丸山地区に先立つ緊急発掘調査で竪穴住居址8軒を発見した長峰遺跡（原村遺跡番号13）。やはり、平成4年度に県営圃場整備事業恩前地区に先立つ緊急発掘調査で竪穴住居址4軒を発見した土井平遺跡（原村遺跡番号95）、平成4・5年度に竪穴住居址24軒を発見した程久保遺跡（原村遺跡番号15）、平成5年度に竪穴住居址9軒を発見した恩勝西遺跡（原村遺跡番号23）が、同じ尾根筋に点在し平安時代の遺跡群が形成されている。

これより西は約2,000m先でフォッサマグナの西縁である糸魚川一静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られる。

2 遺跡の歴史的環境

裏長峰遺跡の発見はそれほど古いくことではないが、遺跡の位置などが不明であり原村誌上巻では次のように述べている。全文を紹介しておきたい。

（14）裏長峰遺跡（柏木）

柏木区の北方に位置する遺跡である。

昭和54年度分布調査で、縄文時代中期の曾利式土器破片、石器では打製石斧・磨製石斧・凹石を採集した地点を本遺跡としたが、昭和46年度分布調査報告書をみると、本遺跡より若干東に寄った地点を上井平遺跡と呼称している。しかし、その地点は現在水田で、遺跡の範囲を確認することができない状態であり、本遺跡の明確な範囲は不明である。

裏長峰遺跡は原村誌で述べているように、昭和46年度に県教育委員会が実施した農業振興地域等開発地域埋蔵文化財分布調査で発見した「上井平遺跡（縄文時代中期）」であるが、上井平遺跡の名称は『信濃史料』すでに使用されている遺跡名（現在の上居沢尾根遺跡）であり、少なからず混乱が生じていたこともあり、昭和54年度に県教育委員会で実施した八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査で「裏長峰遺跡」に整理改名し今日に至っている。

III 調査方法

1 調査区の設定と調査の方法

発掘に先立ち、東西南北（磁北）に軸を合わせたグリッドを設定した。東西方向には50mの大地区を設け、西からA区・B区・C区・D区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに $2 \times 2\text{m}$ の小地区（グリッド）に分割し、東西方向は西からA～Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを50とし、そのラインを基準に南方向は49・48・47というように南にいくにしたがい小さくなるように、北方向は51・52・53と大きくなるように振分けた。

個々のグリッドの呼びかたは、たとえば第4図遺構配置図西端の $2 \times 2\text{m}$ 発掘グリッドでみると、大地区はB区であり、小地区的東西方向はCラインにあたり、南北方向は50ラインで、それは「C-50」となる。したがって小地区的前に大地区を表記した「BC-50」となる。

発掘調査の対象は、平成4年度県営圃場整備事業恩前地区にかかる裏長峰遺跡の全域によぶるが、述べてきたように遺跡の範囲が不明瞭なため準備期間中に踏査を数回行い、調査方法を検討し表土の厚さが不明であることから当初は手掘りでグリッド発掘を行った。遺跡の性格と範囲がほぼ確認できた時点で重機による表土剥ぎをはじめ、引き続き人力で遺構の検出に努めた。

発掘調査は原則としてローム層の上面まで層位別に行った。

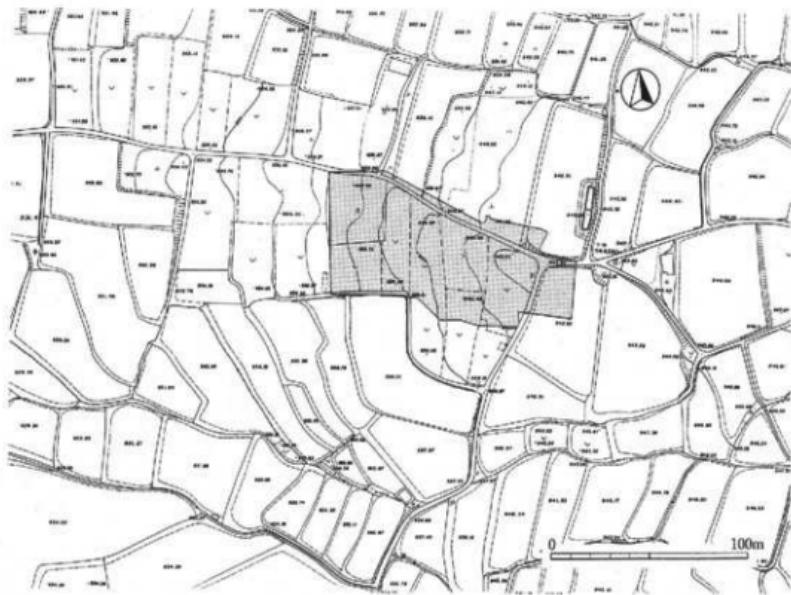
遺物は、基本的にグリッド別・層位別にとり上げ、遺構に伴うものは遺構別に取り上げた。

測量は、予め設定した 2m 四方のグリッドを基準とするやり方方式による。

2 土層

本遺跡における層序は、尾根上とその斜面では違いがみられた。それは尾根幅が狭く土層が安定していないことによるものと思われた。

尾根上から緩やかな南斜面は住居址が検出できた地区であるが、地山のローム層までは浅い所が多い。層序はしっかりしているところもあるが、不安定な所の方が多く中にはロームを粉碎して耕作土にしている所もみられるなど最悪の状態である。基本的には上層から黒褐色土（表土）・黒色土・黒褐色土・褐色土・ソフトロームである。



第3図 発掘調査区域図・地形図

表土である耕作土の直下がローム層になる所が広範囲におよび、黒土の堆積が薄いうえに流失が多かったためであろう。

斜面は、地表面に礫が散乱し、礫屑ないしは含礫ローム層までの深さはグリッドによつてまちまちである。

おおまかな観察結果を記しておきたい。

尾根上

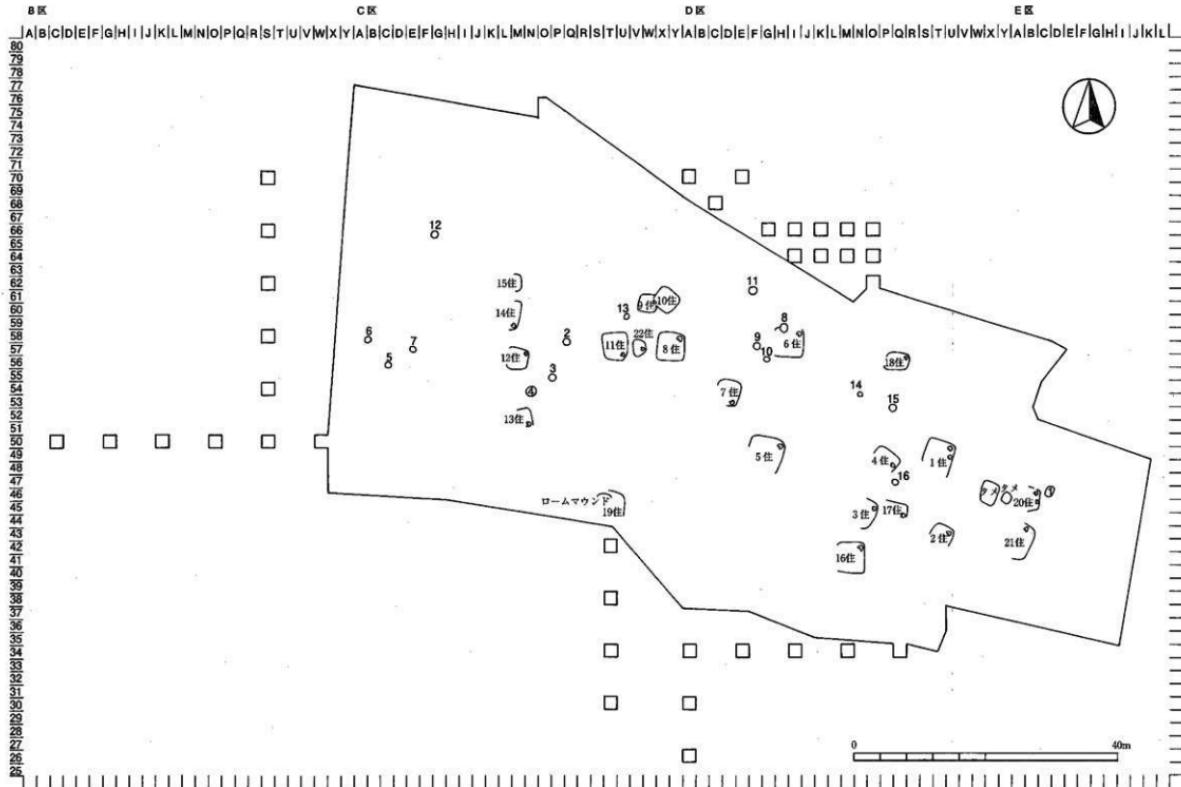
第Ⅰ層 黒褐色土層 表土層・畑の耕作土である。

第Ⅱ層 黒色土層 第Ⅰ層よりしまっている。ローム層までが深い箇所はこの層が厚く堆積していた。上半部からは平安時代の遺物が、下半部から第Ⅲ層にかけて僅かではあるが縄文時代の遺物が出土した。

第Ⅲ層 黒褐色土層 しまり堅さは第Ⅱ層と同じである。この層の認められない箇所もある。

第Ⅳ層 褐色土層 いわゆるローム漸移層である。

第Ⅴ層 ソフトローム層



第4図 連携配置図 (1 : 600)

斜面

- 第Ⅰ層 黒褐色土層 表土層・畑の耕作土である。尾根上より黒色味は強い。
- 第Ⅱ層 黒色土層 第Ⅰ層よりしまっている。
- 第Ⅲ層 真黒色土層 含疊ローム層までが深い箇所はこの層の堆積が厚い。下半部には疊が包含されている。疊の大きさは握り拳大から頭大よりも大きなものまでまちまちである。縄文時代の遺物が僅かに出土した。尾根上では認められない。
- 第Ⅳ層 含疊黒褐色土層 疊の大きさは第Ⅲ層と同じであるが、疊が多くなり疊層と呼んでもよい状態である。
- 第Ⅴ層 含疊褐色土層 疊の大きさは第Ⅲ・Ⅳ層と同じである。色調が褐色になる以外は第Ⅳ層と変わることはない。
- 第VI層 含疊ローム層

3 調査の概要

平成4年度県営圃場整備事業恩前地区に先立つ発掘調査で、平成4年5月1日から9月7日にわたり、第4図に示したように $6,593m^2$ の平面発掘を実施した。

旧石器時代のナイフ形石器1点が出土し、付近の調査を行ったが新に石器を発見するまでには至らなかった。

縄文時代は小豎穴1基で伴出遺物が少なく性格などはわからない。

平安時代後期は平坦地に展開する豎穴住居址22軒と小豎穴15基である。小豎穴15基を本報告では平安時代としたが、伴出遺物が少なく明確なことは不明である。

時代不詳の小規模の集石1基を検出したが性格などは不明である。それらの分布状況は第4図に示した通りである。

検出した遺物と遺構は次の通りである。

旧石器時代

旧石器時代後期ナイフ形石器1点

縄文時代

縄文時代早期・中期・後期土器破片と石器

小豎穴 1基

平安時代

平安時代後期土師器・灰釉陶器破片、鉄製品

後期豎穴住居址 22軒

小豎穴 1基

時代不詳	
小豎穴	14基
集石	1基
近世から現代	
タメ址	3基

IV 遺構と遺物

1 旧石器時代の遺物

(1) 遺構に伴わない遺物

旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器1点が単独出土しただけである。

遺構検出作業中に、ナイフ形石器がDQ-47グリッドから出土した。この辺りは遺跡の中ではやや小高い所で、耕作土は浅く、耕作の歴史がローム層に達していた。また、平安時代の豎穴住居址はローム層中に構築されており、ローム層の掘り返しが行われている。それらの掘り返しで石器が上層に上がった可能性を考え、平安時代の調査終了後にDN-47~51、DO-47~51、DP-47~51、DQ-47~51、DR-47~51、DS-47~51、DT-47~51の35グリッド140m²を対象に旧石器時代の遺物包含層の有無を確認する調査を行った。しかし、遺物の出土は皆無であった。

石器

図示しなかったが縦長剥片を素材にしたナイフ形石器が1点ある。基部をわずかに欠損するが頁岩製で大きさは長さ8.2cm、幅2.6cm、厚さ1.1cmである。

2 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は小豎穴1基だけである。

(1) 小豎穴

検出した小豎穴は16基あるが、縄文時代の遺物を伴出した小豎穴は1基だけである。

小豎穴14（第4・33図）

第18号豎穴住居址の南西に位置する。DN-53・54グリッドで検出したが耕作で擾乱されている。平面形は85×76cmの楕円形で深さは31cmである。壁はロームで立ち上がりは緩やかで底面は平らである。壁際の底面から安山岩の礫1点が出土した。

出土した遺物は図示しなかったが石器がある。

石器は、石鎚1点、石錐1点、黒曜石の小剥片14点である。石鎚の出来栄えは良くない

（2）遺構に伴わない遺物

出土した遺物は図示していないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代早期の押型文土器の小破片である。

石器は、石鎚4点、打製石斧6点、四石1点、叩き石1点、黒曜石剥片65点、その他の剥片16点である。剥片の多くは平安時代の住居址から出土した。

3 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は豎穴住居址22軒と小豎穴15基で、第9号豎穴住居址と第10号豎穴住居址が重複していたこと、また、第1号豎穴住居址と第22号豎穴住居址では新・旧の籠を検出したことで、少なくとも2時期にわたる集落が考えられる。

小豎穴の帰属時期については、伴出遺物が皆無または時期決定ができるような土器が出土したものはないが、便宜的にここで記述しておきたい。

なお、カッコ付けの数値は重複ないしは一部を欠損している遺構であり、現存する部分からの推定値を示している。

報告書作成にあたり整理期間の関係で遺構・遺物の分析に未だ手を付けることができないでいる。遺物の出土数については接合できなかった破片数を記述したが、復原作業が終了していないため概ねのものである。

（1）豎穴住居址

検出した豎穴住居址は22軒である。

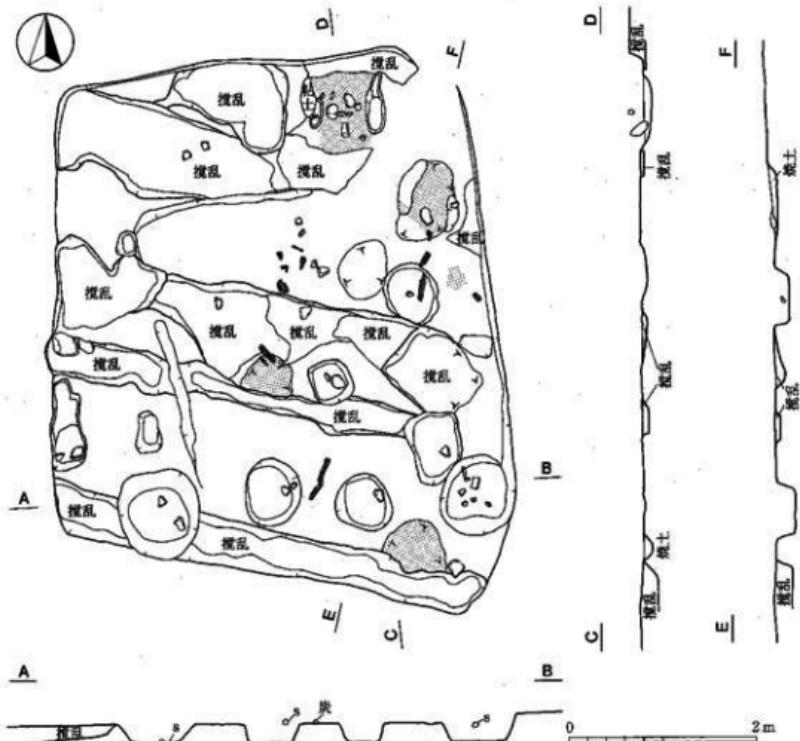
第1号豎穴住居址（第4～6図、表3、写真3）

遺跡の北東端に位置する。DS-47～50、DT-47～50、DU-47～50の12グリッドに跨る隅丸方形を呈する豎穴住居址であるが、表土が浅く耕作の歴による擾乱が著しく、東壁、

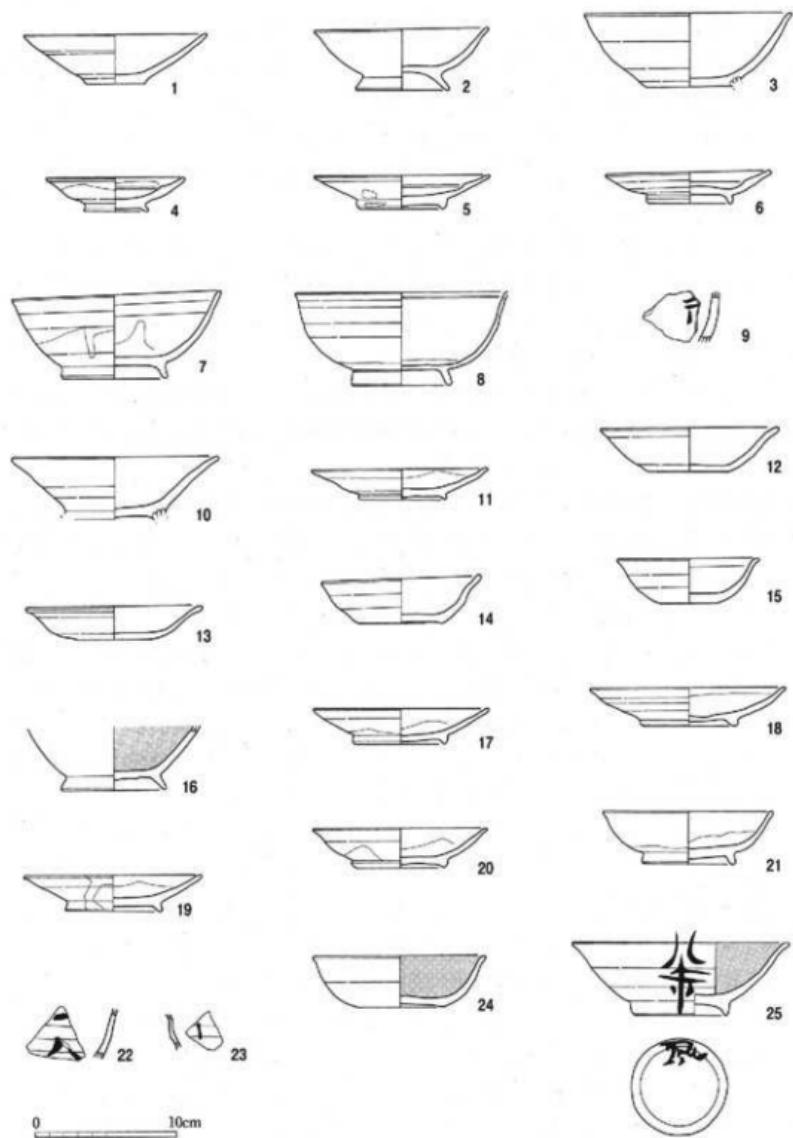
北壁、西壁の一部が確認できただけである。なお、焼土化した竈の火床を2ヶ所で検出したが、耕作の歴は床面に達しており平面プランが明確にできない状態で、住居址が重複している可能性もあるが、ここでは竈が作り替えられた新・旧2時期の住居址と考え記述しておきたい。

埋土の観察は、南北方向で行ったが堆積が薄い上に耕作による搅乱が著しく埋没状況はわからない。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので大きさは東西467cm、南北(530)cmである。耕作による歴の掘り込みは深く床面に達しており、壁と床を著しく破壊している。遺存した範囲での観察結果を記しておきたいが、壁はほぼ垂直に立ち上がり普通で、壁高は東・西・北ともに5cmほどと低い。床面はほぼ平らでタクキ床も認められるが普通である。柱穴と思われるものはない。東と南壁際にはピットが並ぶが深さは8~19cmと柱穴に



第5図 第1号竪穴住居址実測図 (1:60)



第6図 第1～4号竪穴住居址出土土器実測図（1：4）

は浅く性格は不明である。

竈は、焼土化した火床の検出状況から新・旧2時期のものがある。

新竈は、北壁の中央右より壁際の焼土が火床である。破損は著しく竈石は抜き取れ僅かな粘土が左袖部に遺存しただけである。焼土両脇には袖石の掘り方があるが、右袖部は長楕円形のものが2穴で大きさは25×10cmで深さは14cm。40×20cmで深さは21cmである。左袖部は長楕円形のものが1穴あり32×12cmで深さは15cmである。焼土の厚さは10cmほどで下層も火熱で変色している。

旧竈は、新竈の東南に位置する焼土が火床である。破損は著しく竈石は抜き取られ焼土が遺存しただけである。焼土の両脇には袖石の掘り方があるが、右袖部は長楕円形で大きさは40×12cmで深さは21cm。左袖部も長楕円形で大きさは64×15cmで深さは12cmである。焼土の厚さは9cmほどで下層も火熱で変色している。

畝で半分くらいを欠損するピットは、浅いすり鉢状のピットで底面が焼土化した火床で鍛冶炉の可能性が高いものである。火床をはじめ付近が著しく畝で搅乱されていたことが残念である。

埋土が薄い上に搅乱が著しく出土した遺物は少ないが土師器と灰釉陶器がある。床面上には多くの炭化材が遺存していたが、床面を掘り下げる耕作の畝による欠損の方が多く性格を究明することはできなかった。

出土した遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品がある。

供膳形態は土師器の壺1点（第6図1）、碗2点（2・3）、灰釉陶器の段皿3点（4～6）、碗2点（7・8）、墨書き器破片1点（9）である。6・7には遺構外出土破片が接合した。7の内面と外面には肉眼観察では黒漆と思われるものが付着する。9は墨書き器であるが小破片で解読できない。図示できなかった破片は土師器の壺類が198点、壺類が72点、須恵器の壺類が4点、壺類が3点、灰釉陶器の碗類が28点である。

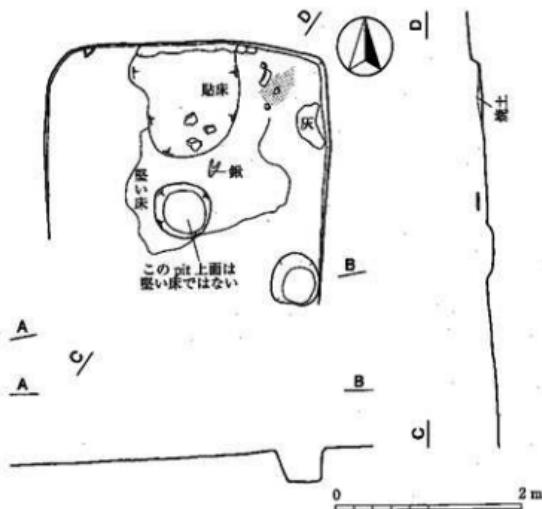
鉄製品は破損が著しく図示できなかった機種不明なもの1点（表3）である。

第2号竪穴住居址（第4・6・7・12図、表3、写真4・5）

第1号竪穴住居址の南に位置する。DS-43・44、DT-43～45、DU-43・44の7グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址であるが、すでに南壁は流失している。

埋土の観察は、住居址の認定が遅れたことで適切な土層観察ベルトを設定しなかったが、掘り込みが浅いうえに色調の変化は乏しかったが自然埋没と思われる。

竪穴住居址は、黒色土層中に構築されていたもので大きさは東西305cm、南北（300）cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり普通で、壁高は東が6cm、西は4cm、北は9cmと低い。床面はほぼ平らのタタキ床で部分的に貼床がみられる。周溝は北壁直下にみられたが部分



第7図 第2号竪穴住居址実測図（1：60）

的なもので幅は6~10cm、深さは2cmと浅いものである。なお、周溝が確認できた範囲は硬い床面部分だけである。ピットは1基検出したが、深さ34cmで柱穴と思われるが特定できない。

竪は、北東隅に石組粘土竪が構築されていたが、破損は著しく多くの竪石は抜き取られ左袖石の一部と僅かな粘土が残存しただけで原形を留めていない。焼土の厚さは2cmほどである。

出土した遺物は少ないが土師器・灰釉陶器・鉄製品・鉄滓がある。

供膳形態は土師器の碗1点（第6図10）、灰釉陶器の皿1点（11）である。10は外面に炭化物が付着する。図示できなかった破片は土師器の壊類が103点、壺類が15点、灰釉陶器の碗類が4点ある。

鉄製品は鍔先の優品1点（第12図1、表3）で、住居址ほぼ中央からの出土で床面より10cmくらい浮いていた。

鉄滓は1点で重さは5.5g（表3）である。

第3号竪穴住居址（第4・6・8図、表3、写真6・7）

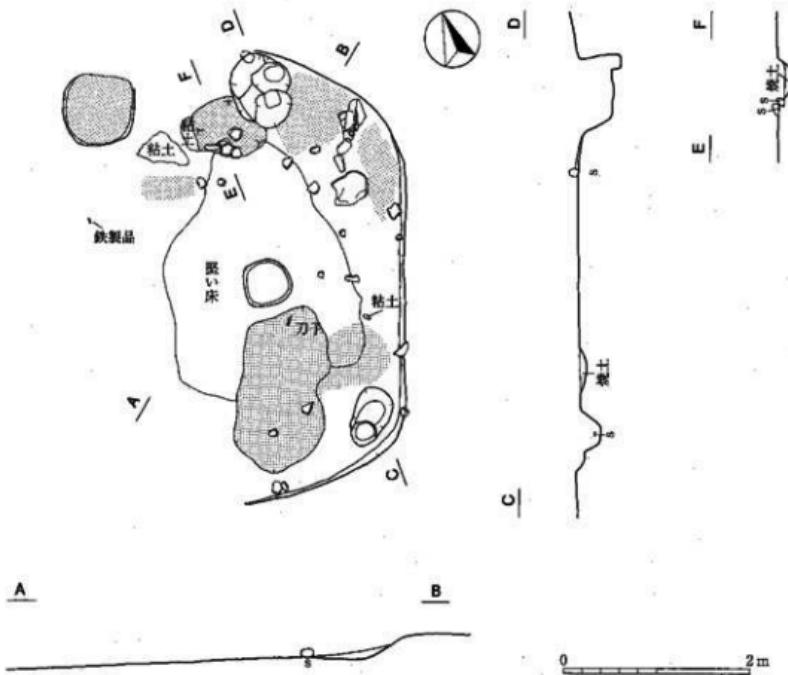
第2号竪穴住居址の西に位置する。DM-43~46、DN-43~46、DO-43~45の11グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址と思われるが、東壁と南壁の一部を確認ただけ

であり明確なことはわからない。

埋土の観察は、堆積が薄く適切な土層観察ベルトを設定できなかったが、極めて多量の焼土が含まれていたが、火災により廃絶したとは考えられない状況で鍛冶址に係るものである。

竪穴住居址は、黒色土層中に構築されていたもので大きさは東西 (425) cm、南北 (425) cmくらいである。壁はほぼ垂直に立ち上がり普通で、壁高は東が11cm、南は15cmである。床面はほぼ平らで部分的に貼床がみられるがタタキ床で良好である。中央部分に貼床がみられたが、床面を作り直した状態で重複によるものではない。南東隅のピットは深さ28cmで柱穴状であるが対となるピットはなく柱穴に特定できない。なお、鉄製品が出土した。竪左隣に接するピットは数基が重複した状態であるが、抽石の掘り方とは考えられないものであり性格は不明である。

竪は、北東隅に石組粘土竪が構築されていたが、破損は著しく多く竪石は抜き取られ右袖石と僅かな粘土が遺存しただけで原形を留めていない。焼土の厚さは7cmほどである。



第8図 第3号竪穴住居址実測図 (1 : 60)

竈以外に焼土化した火床を3ヶ所で、貼床の下からも2ヶ所検出したが、便宜的に焼土1～5と呼び記述するが、焼土1・2・4は鐵冶炉の可能性が高いものであり、焼土3・5も鐵冶に係るものと思われる。

焼土1は北壁際の浅いピット内が焼土化したもので、焼土の厚さは6cmほどで下層も火熱で変色している。ピットのまわりから南側床面は極めて硬い。

焼土2は東壁際の焼土化した火床であるが平面形は円形で、竈の火床である焼土とは平面形が確実に異なる。焼土の厚さは7cmほどで下層も火熱で変色している。同様の焼土が第7・17・18・21号竪穴住居址豎穴でみられた。

焼土3は焼土2の西南に続くもので広範囲が焼土化し浅く落ち込み凹状になる。焼土の厚さは6cmほどである。

焼土4は貼床の下層で、浅いすり鉢状のピット内が焼土化したものである。南壁際には小疊5点が西壁際には粘土が遺存した。焼土の厚さは9cmほどで下層も火熱で変色している。

焼土5も貼床の下層で、焼土4の南西に位置するが焼土4と同施設のように思われる。焼土の厚さ3cmほどである。

出土した遺物は少ないが土師器・須恵器・灰釉陶器・鐵製品がある。

供膳形態は土師器の壺4点（第6図12～15）、碗1点（16）、灰釉陶器の皿4点（17～20）、碗1点（21）、墨書き土器の破片2点（22・23）である。12・22・23は貼床下からの出土、14・15・20は竈右袖からの出土である。16は暗文が施されているようであるが不明瞭であり図示できない。18は硯として使用されている。22・23は墨書き土器であるが小破片で解説できない。図示できなかった破片は土師器の壺類が234点、甕類が62点、須恵器の甕類が4点、灰釉陶器の碗類が27点である。

鐵製品は破損が著しく図示できなかった刀子2点、火打金具1点（表3）である。

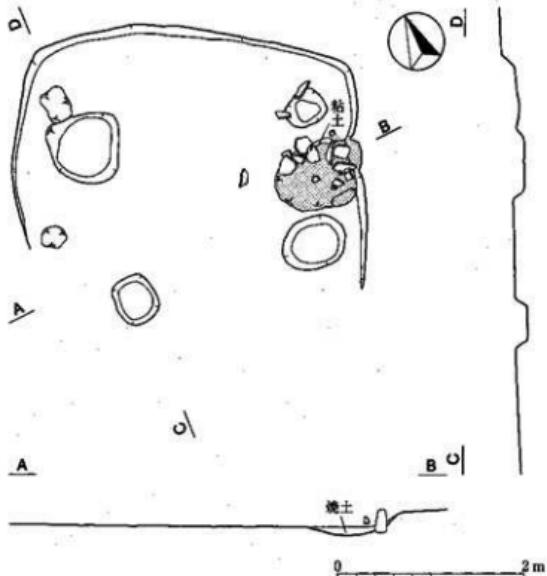
鐵滓は1点で重さは19.4g（表3）で貼床下からの出土である。

第4号竪穴住居址（第4・6・9図、写真8・9）

第1号竪穴住居址の西に位置する。DO-48・49、DP-48・49、DQ-48・49の6グリッドに跨る不整の隅丸方形を呈する竪穴住居址であるが、すでに南壁は流失している。

埋土の観察は、堆積が薄い上に耕作による搅乱が著しく土層観察ベルトは設定しなかつたが、色調の変化に乏しく詳しいことはわからないが、床面に近いほどローム粒が多くみられる自然埋没である。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので大きさは東西372cm、南北（340）cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり普通で、壁高は東が14cm、西は8cm、北は16cmと低い。



第9図 第4号竪穴住居址実測図 (1 : 60)

床面はほぼ平らでタタキ床も認められるが普通である。竪北のビットは深さ27cmで柱穴状であるが1基だけで柱穴に特定することができない。竪南のビットはその位置から灰だめであろう。

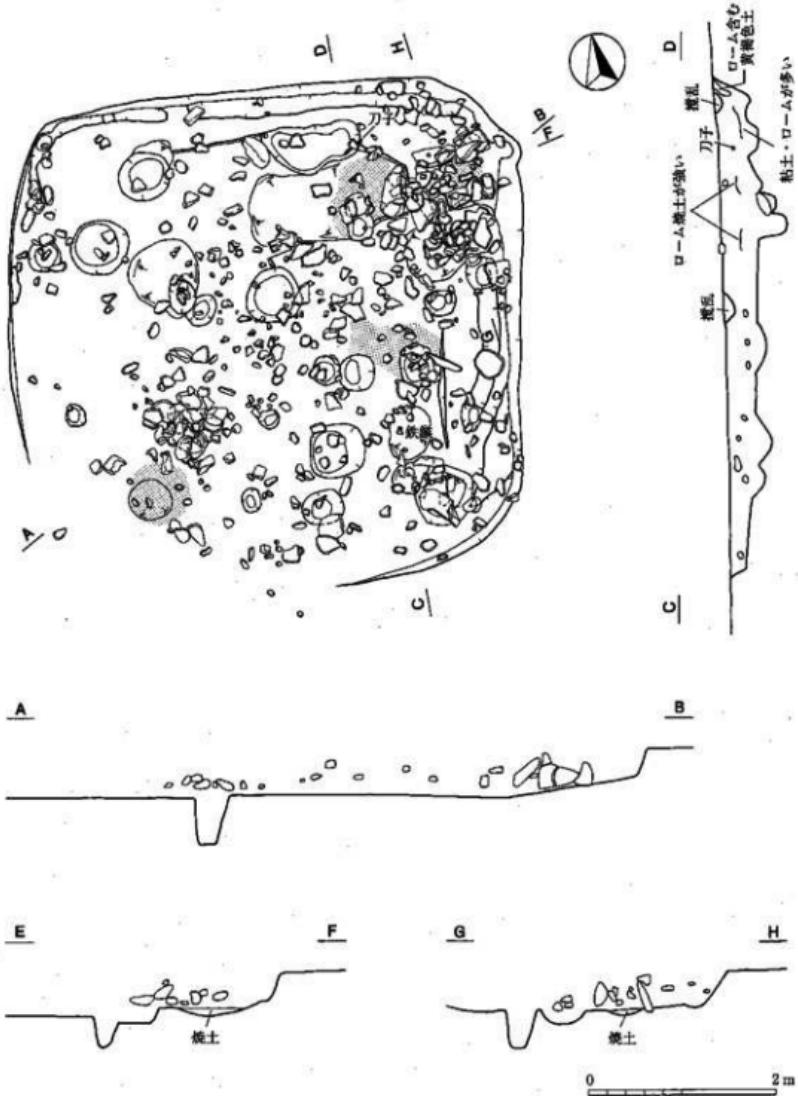
竪は、東壁に石組粘土竪が構築されていたが、その破損は著しく壁際の袖石と僅かな粘土が北袖部に遺存しただけである。竪石は付近に散乱していたがその数は少なく持ち去られたものがあるようである。右袖部には袖石の掘り方があり大きさは29×12cmで深さは9cmである。焼土の厚さは4cmほどである。

出土した遺物は少ないが土師器・須恵器・灰釉陶器がある。

供膳形態は土師器の壺1点(第6図24)、碗1点(25)である。墨書は「八米」とみえるが、高台内にも墨書とも汚れともみえるものがあるが明確なことはわからない。図示できなかった破片は土師器の壺類が24点、甕類が28点、須恵器の甕類が4点、灰釉陶器の碗類が4点ある。

第5号竪穴住居址 (第4・10~12図、表3、写真10~12)

遺跡のほぼ中央に位置する。DE-48・49、DF-48~50、DG-48~50、DH-48~50の



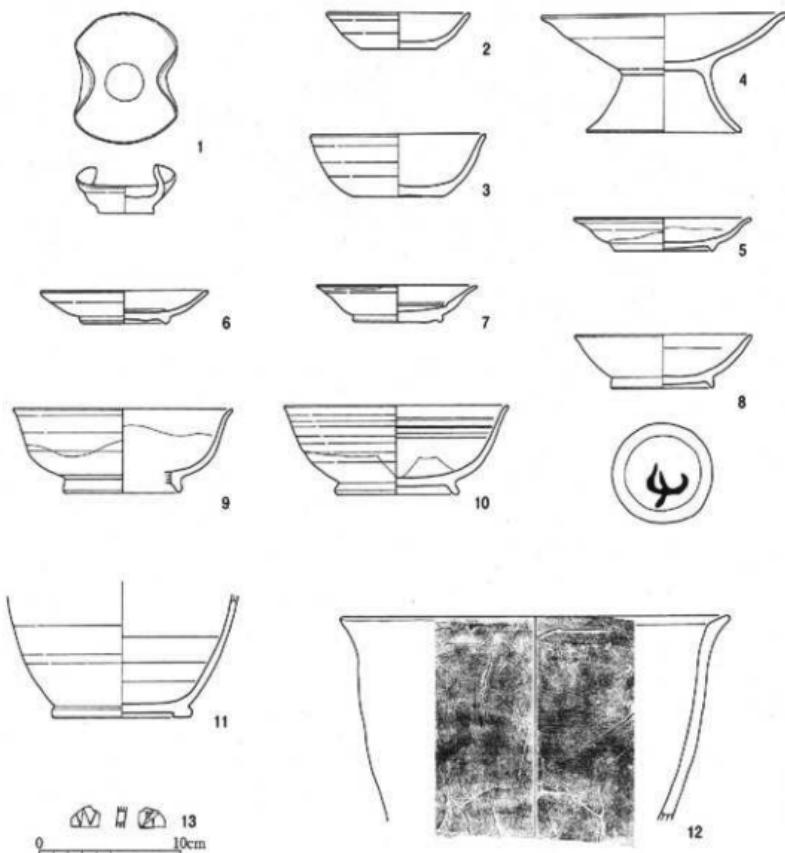
第10図 第5号竪穴住居址実測図 (1 : 60)

11グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址であるが、北壁・東壁・西壁を検出しただけである。

埋土の観察は、南北方向に土層観察ベルトを設定した。色調の変化に乏しく詳しいことはわからないが、握り拳大から人頭大の数多い礫が含まれていた。埋没途上に遺棄されたものであり基本的にはレンズ状堆積の自然埋没である。

なお、貼床の下から発見の火床とピットを検出し重複を確認したが、本址にすっぽりと入る小さなもので第5号旧竪穴住居址とした。

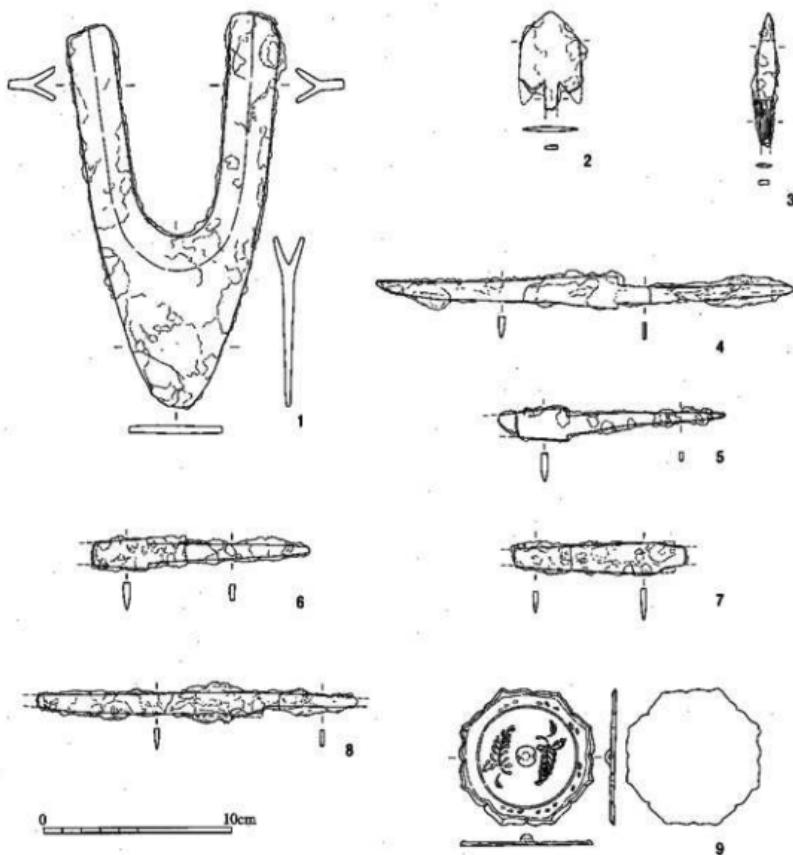
竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので大きさは東西550cm、南北(550)cm



第11図 第5号竪穴住居址出土土器実測図 (1 : 4)

である。壁はほぼ垂直に立ち上がり普通で、壁高は東が30cm、西は7cm、北は32cmである。床面はほぼ平のタタキ床で硬いが地山の礫がみられる。部分的に貼床が認められその下層から竪穴とピットを検出したことで旧い竪穴住居址を確認した。周溝は北壁直下と西壁直下の一部、東壁際でみられたが幅12~22cm、深さは4cmと浅いものである。柱穴状のピットもみられたが、対になるピットがなく柱穴に特定できない。耳皿の完形品がピットから出土した。

竪穴は、北東隅に石組粘土竪穴が構築されていた。保存状態は良く天井石が崩れ竪穴前面に散



第12図 第2・5・11・16・21号竪穴住居址出土鉄製品、第21号竪穴住居址出土八稜鏡実測図（1：3）

乱していた以外は原形を留め、粘土はボロボロであるが多量に遺存していた。焼土の厚さは5cmほどである。

南西隅にも焼土化した火床がある。すり鉢状のピット内に充満する土が焼土化したもので平面形は円形で、竈の火床とはあきらかにその形状が異なり鍛冶炉の可能性が高いものである。焼土の厚さは18cmほどである。

第5号旧竪穴住居址

東壁から80cm、北壁から50~60cm内側の貼床下から旧住居址の壁を検出したが、第5号竪穴住居址の中にはすっぽりと入る小さな住居址で、第5号旧竪穴住居址と呼ぶことにした。

東壁と北壁を確認しただけであり竪穴の規模を推定することはできない。壁はほぼ垂直に立ち上がり壁の高さは5~9cmである。床面はほぼ平らである。柱穴状のピットもみられたが規格性に乏しく柱穴に特定できるものはない。

竈は、焼土化した火床は2ヶ所にあるが新旧関係が不明なため便宜的に焼土1、焼土2と呼んでいきたい。

焼土1は、北東隅の火床であるが新住居址のピットで切られている。焼土の厚さは4cmほどである。

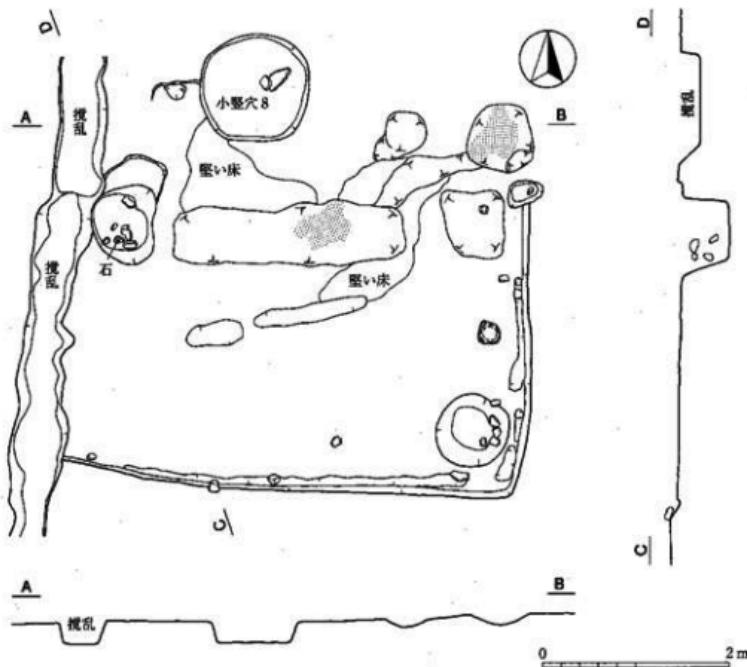
焼土2は、東壁際の火床であるがやはり新住居址のピットに切られている。焼土の厚さは11cmほどである。

出土した遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・鉄製品・鉄滓がある。

供膳形態は土師器の耳皿1点(第11図1)、壺2点(2・3)、盤1点(4)、灰釉陶器の皿2点(5・6)、段皿1点(7)、碗3点(8~10)で、貯藏形態は灰釉陶器の壺1点(11)で、煮沸形態は土師器の壺1点(12)、刻書土器の破片1点(13)である。8は高台内に墨書きとも汚れとも見えるものがあるが解説不明で明確なことはわからない。13は焼成後に施された刻書きであるが小破片で詳しいことはわからない。図示できなかった破片は土師器の壺類が547点、壺類が686点、須恵器の壺類が9点、灰釉陶器の碗類が75点、綠釉陶器の破片が2点ある。なお、綠釉陶器の破片は別個体のものである。

鉄製品は鉄鎌2点(第12図2・3)、刀子1点(4)、破損が著しく図示できなかった機種不明のもの4点(表3)である。4には柄・鞘と思われる木質が付着している。不明鉄製品4点は棒状のもので1点の断面は円形で紡錘車の軸、3点の断面は方形と長方形で鉄鎌(刀子)の中子のようである。

鉄滓は12点で重さは1,216.4g(表3)であるが、2点はピットから出土した。



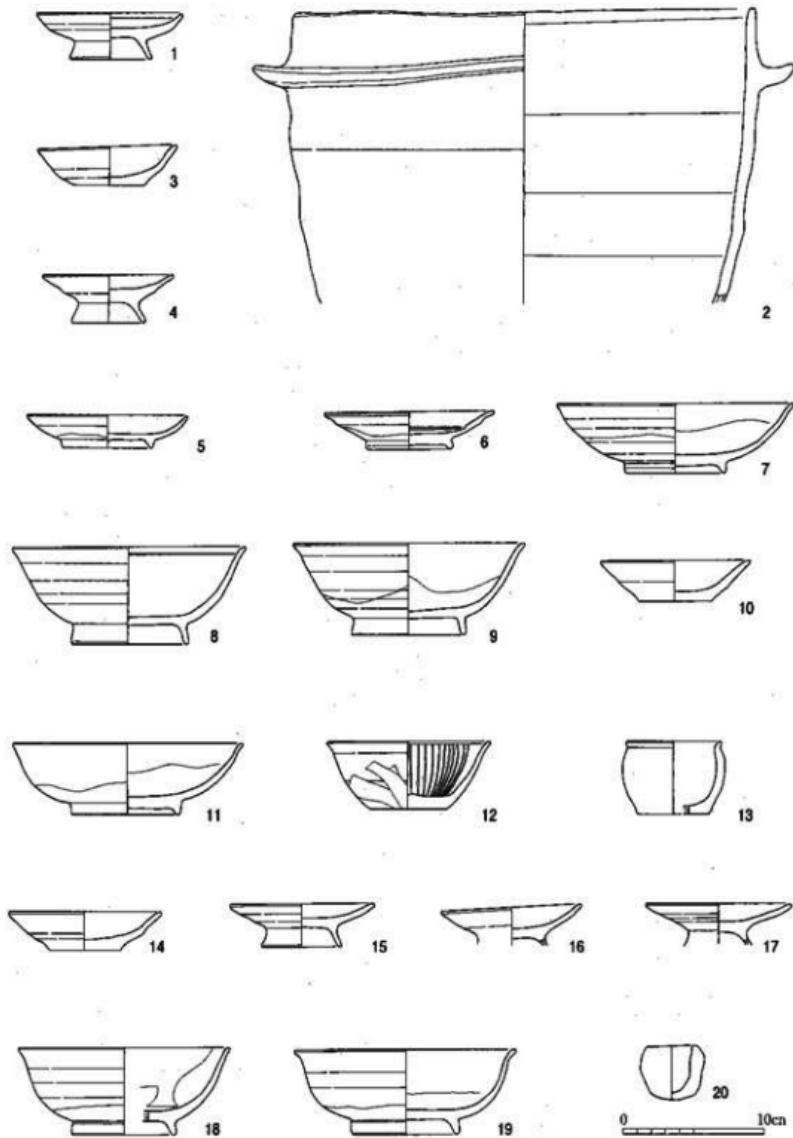
第13図 第6号堅穴住居址実測図

第6号堅穴住居址（第4・13・14図、写真13・14）

第5号堅穴住居址の北に位置する。DG-56~58、DH-56~59、DI-56~59、DJ-57・58の13グリッドに跨る隅丸方形を呈する堅穴住居址であるが、東壁と南壁を検出しただけで西壁辺りは耕作の歴で著しく搅乱されている。北壁では小堅穴8と重複しているが、本址が旧く小堅穴8が新しい。

埋土の観察は、南北方向に観察面を設定したが、堆積が薄いうえに耕作の歴による搅乱が著しく詳しいことはわからないが、逆三角堆土と三角堆土がみられた自然埋没である。なお、耕作による歴の掘り込みは深く床面に達していた。

堅穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので大きさは東西(500)cm、南北(430)cmくらいである。壁はほぼ垂直に立ち上がり普通で、壁高は東が10cm、南は8cmと低い。床面はほぼ平のタキ床で良好であるが、歴により破壊された個所がある。周溝は東壁直下の一部と南壁直下にみられるが、幅は7~10cm、深さは深いところで6cmである。ピッ



第14图 第6·8~11号窑穴住居址出土土器实测图 (1:4)

トは柱穴に特定できるものはなく性格は不明である。

竈は、北東隅の焼土が火床である。破損は著しく竈石は抜き取られ僅かな粘土が遺存していただけである。火床はすり鉢状に凹み右袖部には袖石の掘り方が1穴あるが、椭円形で大きさは35×18cmで深さは13cmである。焼土の厚さは1cmほどである。

竈南西には、東西に細長い長方形の浅い凹があり、その凹内の一部が焼土化した火床となるが、焼土の径は40cmで厚さは3cmほどである。

出土した遺物は土師器・灰釉陶器・石製品がある。

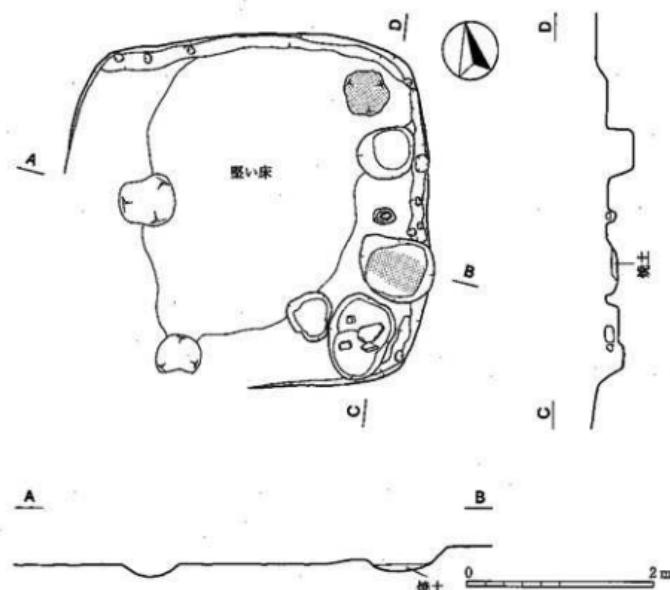
供膳形態は土師器の盤1点（第14図1）、煮沸形態は土師器の羽釜1点（2）がある。

図示できなかった破片は土師器の壺類が52点、甕類が37点、灰釉陶器の碗類が6点ある。

石製品は砥石1点である。

第7号竪穴住居址（第4・15図、写真15）

第5号竪穴住居址の北西、第6号竪穴住居址の西南に位置する。DC-53~55、DD-53~55、DE-53~55の9グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址であるが、北壁、東壁と西壁の一部を検出しただけである。



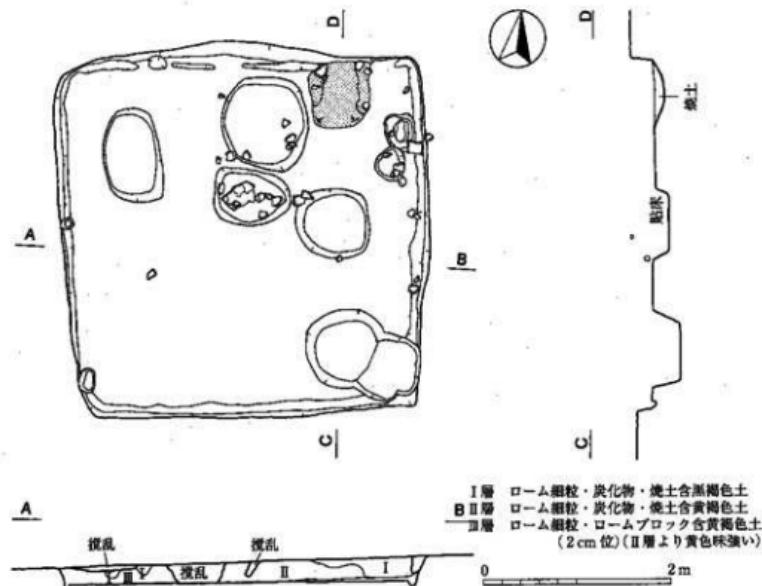
第15図 第7号竪穴住居址実測図（1:60）

埋土の観察は、堆積が薄いうえに耕作の歴による擾乱が著しく詳しいことはわからないが、逆三角堆土と三角堆土がみられた自然埋没である。なお、歴は深く床面までを掘り返していた。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので大きさは東西395cm、南北377cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり普通であるが、南西隅は自然傾斜の低い所にあたり確認できなかった。壁高は東が10cm、西は2cm、南も2cm、北は13cmと低い。床面はほぼ平らのタタキ床で良好であるが、歴で破壊された個所がある。周溝は東壁と北壁の直下にみられるが、幅は10~18cm、深さは深いところで8cmである。周溝内には径7cm前後で深さ2~14cmの小ピットが穿たれているが、小ピットの間隔は一定していない。竪右のピットは重複する。柱穴状のピットは深さに違いがみられた。

竪は、東壁中央やや右寄り壁際の焼土が火床である。破損は著しく竪石は抜き取られ粘土もない。壁面をわずかに抉る浅いピット内が焼土化しているが、焼土の厚さは7cmほどで下層も火熱で変色している。

北東隅の壁際にも焼土化した火床がある。浅いすり鉢状のピット内が平面円形に焼土化したもので、竪の火床とはその形状があきらかに異なり鍛冶炉の可能性が高いものである。



第16図 第8号竪穴住居址実測図 (1 : 60)

焼土の厚さは3cmほどである。同様のものが第3・17・18・21号竪穴住居址にある。

出土した遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器がある。

図示できるものはない。破片は土師器の壺類が67点、甕類が48点、須恵器の甕類が1点、灰釉陶器の碗類が9点、壺類が1点ある。

第8号竪穴住居址（第4・14・16図、表3、写真16~18）

第7号竪穴住居址の北西に位置する。CX-56~58、CY-56~58、DA-56~58の9グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址である。

埋土の観察は、東西方向に観察ベルトを設定したが、耕作の歴は深く床面まで達するものがあり搅乱は著しく詳しいことはわからないが、I~IIIに大別したように自然埋没である。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので大きさは東西398cm、南北403cmである。壁は歴で欠損する個所もあるがほぼ垂直に立ち上がり普通で、壁高は東が25cm、西は19cm、南は16cm、北は26cmである。床面はほぼ平らのタタキ床で良好であるが歴で破壊された所がある。周溝は竈部分を除き壁直下にめぐるが、幅は6~12cm、深さは深い所で10cmのしっかりしたものである。ピットは比較的大きなものが多く、南東壁際のピットは深さ30cmで貯蔵穴と思われる。竈左のピットは10cmほどと浅いもので灰だめであろう。柱穴に特定できるものはないが貼床の認められたものがある。

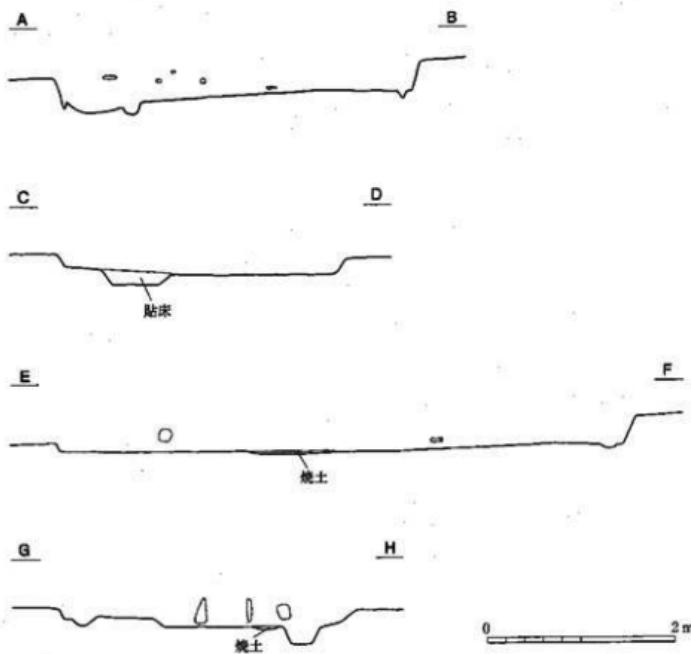
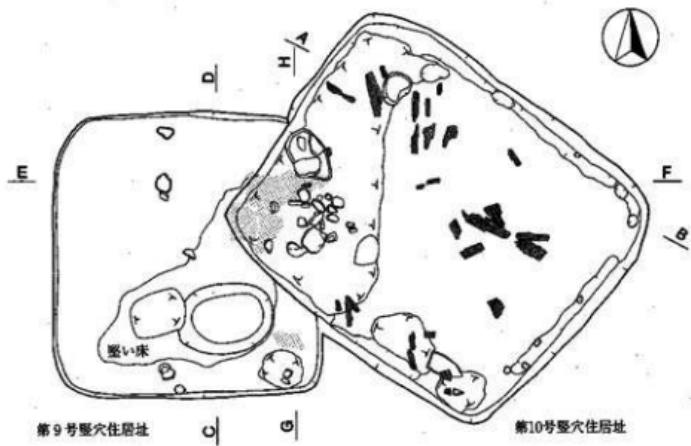
竈は、北壁の中央東寄りに石組粘土竈が構築されていたが、破損は著しく壁際の袖石が遺存しただけで原形を留めていない。付近に竈石はなく持ち去られている。焼土の両脇には袖石の掘り方があるが、右袖部は長楕円形で大きさは56×12cmで深さは9cm。左袖部も長楕円形で38×18cmで深さは6cmである。焼土の厚さは9cmほどで下層も火熱で変色している。

出土した遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品・古銭がある。

供膳形態は土師器の壺1点（第14図3）、盤1点（4）、灰釉陶器の皿1点（5）、段皿1点（6）、碗3点（7~9）である。9には第10号竪穴住居址出土破片が接合した。図示できなかった破片は、土師器の壺類が130点、甕類が157点、須恵器の甕類が1点、灰釉陶器の碗類が20点ある。硯に転用したと思われる灰釉陶器の碗底部破片1点である。

鉄製品は破損が著しく図示できなかった機種不明なもの1点（表3）である。棒状で断面形は方形で鉄鎌の中子のように思われる。

古銭は1/2程を欠損している上に磨滅が著しく解読不明である。混入遺物であるかもしれない。



第17図 第9・10号竪穴住居址実測図 (1 : 60)

第9号・第10号竪穴住居址

第9号竪穴住居址（第4・14・17図、写真19～23）

第8号竪穴住居址の北西に位置し第10号竪穴住居址と重複する。CV-60・61、CW-60・61、CX-60・61の6グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址である。重複による新旧関係は本址が新しく第10号竪穴住居址が古い。

埋土の観察は、第10号竪穴住居址と重複していたことで、両住居址を通した東西方向に土層観察面を設定した。耕作の歴による擾乱は著しかったが逆三角堆土と三角堆土がみられた自然埋没である。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので大きさは東西284cm、南北306cmである。壁は歴で欠損する個所もあるがほぼ垂直に立ち上がり普通で、壁高は東が15cm、西は10cm、南は12cm、北は15cmである。床面は平らのタタキ床で良好である。ピットは3基検出したが柱穴に特定できるものではないが性格も不明である。

竈は、東壁に石組粘土竈が構築されていたが、天井石を欠損するだけで遺存状態は良い。付近に天井石はなく持ち去られている。焼土の厚さは3cmほどである。

出土した遺物は土師器・灰釉陶器・石製品がある。

供膳形態は土師器の壺1点（第14図10）、灰釉陶器の碗1点（11）である。10は竈内出土、11は竈内出土破片と第10号竪穴住居址出土破片が接合した。図示できなかった破片は土師器の壺類が65点、甕類が135点、灰釉陶器の碗類が3点ある。

石製品は破損した砥石1点である。

第10号竪穴住居址（第4・14・17図、写真19～21）

第8号竪穴住居址の北西に位置し第9号竪穴住居址と重複する。CW-60～62、CX-60～62、CY-60・61の8グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址である。重複による新旧関係は本址が旧く第9号竪穴住居址が新しい。

埋土の観察は、第9号竪穴住居址と重複していたことで、両住居址を通した東西方向に土層観察面を設定した。耕作の歴による擾乱は著しかったが逆三角堆土と三角堆土がみられた自然埋没であるが、多量の炭化材が包含されていた。

炭化材は放射状に遺存していたことから屋根材であり、火災で廃絶したものと思われる。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので大きさは東西393cm、南北328cmである。壁は歴で欠損する個所が多いがほぼ垂直に立ち上がり普通で、壁高は東が34cm、西は22cm、南は26cm、北は25cmである。床面は平らのタタキ床で良好である。ピットはすり鉢状の浅いもので柱穴に特定できるものはなく性格は不明である。

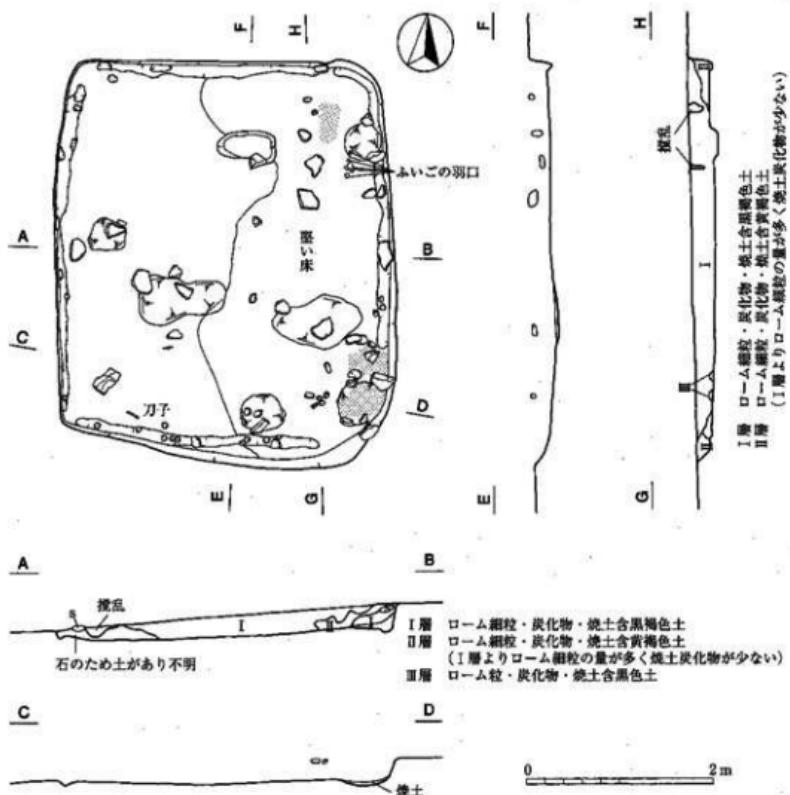
竈は、第9号竪穴住居址との重複ですでに欠損したものと思われる。竈址を確実に示す

ことはできないが、重複で破壊された西隅辺りで焼土の痕跡が認められているが、この焼土が本址竪穴の残骸のようである。しかし、第9号竪穴住居址の竪穴の前面に位置するもので確実なことは言えない。

出土した遺物は土師器・灰釉陶器がある。

供膳形態は土師器の壺1点（第14図12）、貯蔵形態は土師器の小形壺1点（13）である。12には暗文が施されている。13に小豎穴1出土破片が接合した。図示できなかった破片は土師器の壺類が13点、壺類が16点、灰釉陶器の碗類が1点ある。

なお、第8号竪穴住居址（第14図9）、第9号竪穴住居址（第14図11）、小豎穴1（第14図13）に本址出土破片が接合した。



第18図 第11号竪穴住居址実測図 (1 : 60)

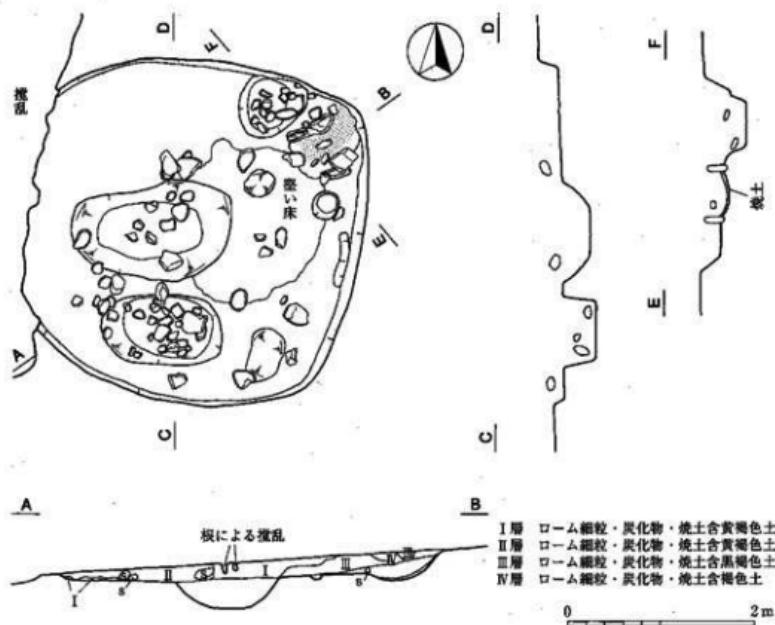
第11号竪穴住居址（第4・12・14・18図、表3、写真24・25・26）

第8号竪穴住居址の西に位置する。CS-56~58、CT-56~58、CU-56~58の9グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址である。

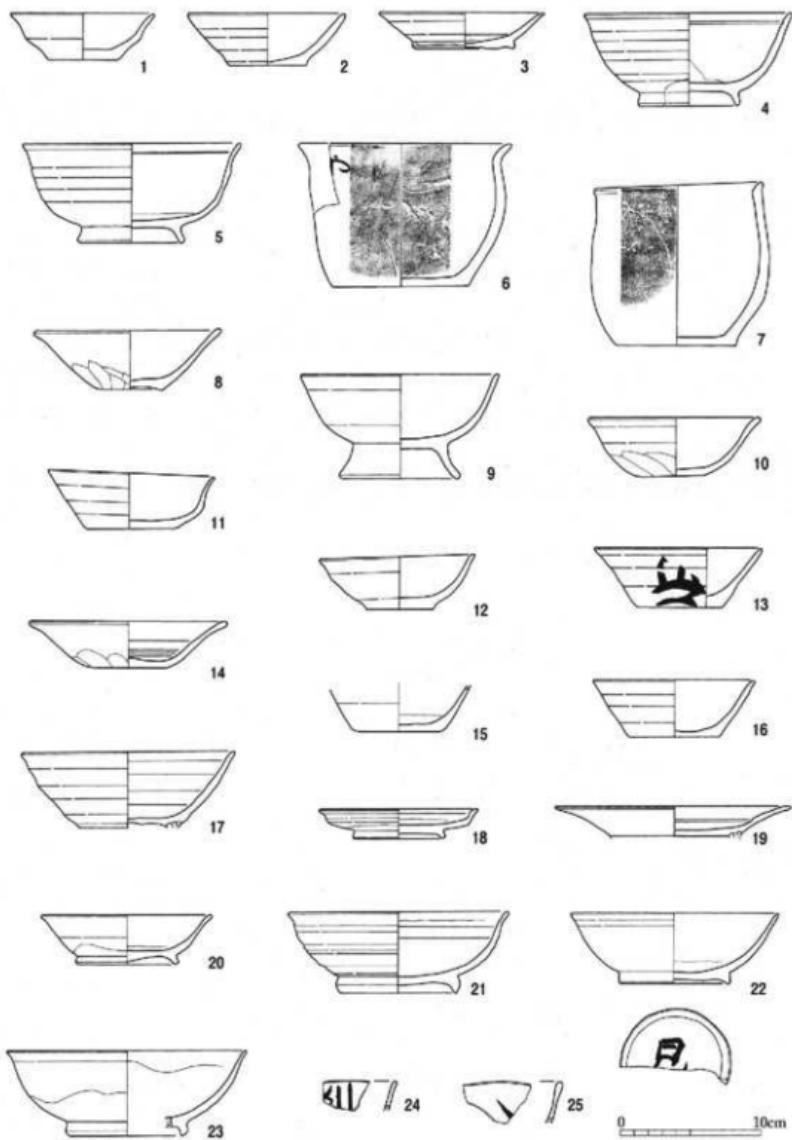
埋土の観察は、東西・南北の2方向に土層観察面を設定した。耕作の歴による搅乱は著しいがⅠ～Ⅲに大別したように逆三角堆土と三角堆土の発達がみられる自然埋没である。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので大きさは東西364cm、南北438cmである。壁は歴で欠損する個所もあるがほぼ垂直に立ち上がり普通で、壁高は東が25cm、西は9cm、南は15cm、北は22cmである。床面はほぼ平らのタタキ床で良好である。周溝は竪部分、北西隅と南西隅を除き壁直下にめぐっているが、幅は7~13cm、深さは深い所で6cmのしっかりしたものである。周溝内には大きさ6×10cm前後の楕円形で深さは8~11cm、径7cm前後の円形で深さ4~7cmの小ピットが穿たれているが、小ピットの間隔に規格性はみられない。ピットは浅いすり鉢状のものが多く、柱穴に特定できるものはなく性格は不明である。

竪は、東南隅に石組粘土竪が構築されていたが、破損は著しく袖石の一部が遺存しただ



第19図 第12号竪穴住居址実測図 (1 : 60)



第20図 第12~14・16号竪穴住居址出土土器実測図 (1 : 4)

けで原形を留めていない。付近に甕石はなく持ち去られている。焼土の厚さは3cmほどである。

甕左隣にも焼土化した火床があるが性格は不明である。焼土の厚さは4cmほどである。出土した遺物は土師器・灰釉陶器・鉄製品・土製品・石製品がある。

供膳形態は土師器の壺1点(第14図14)、盤3点(15~17)、灰釉陶器の碗2点で(18・19)、ミニチュア土器1点(20)である。19は遺構外出土破片が接合した。図示できなかった破片は土師器の壺類が161点、甕類が104点、灰釉陶器の碗類が19点ある。

なお、第12号竪穴住居址(第20図6)に本址出土破片が接合した。

鉄製品は刀子2点(第12図5・6)である。

土製品は焼成された粘土でふいごの羽口と思われるが、55点に小さく破損したもので復原できない。

石製品は破損した砥石1点である。

第12号竪穴住居址(第4・19・20図、表3、写真27~29)

第11号竪穴住居址の西に位置する。CL-55~57、CM-55~57、CN-56・57の8グリッドに跨るやや丸みを持つ隅丸方形を呈する竪穴住居址であるが、西壁は耕作の歴で欠損する。なお、住居ほぼ中央部でピット2基と重複するが、小竪穴番号を付してないためここで記述しておきたい。重複による新旧関係は本址が旧くピット2基が新しい。

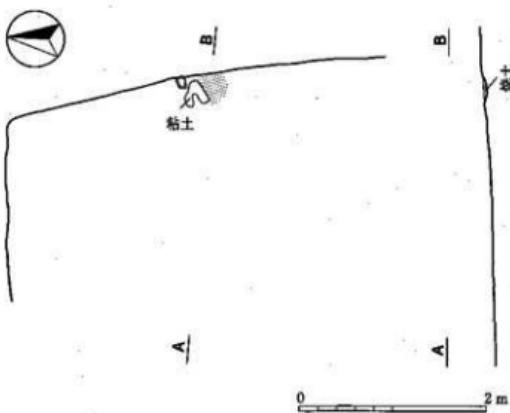
埋土の観察は、甕が構築されていた北東隅から南北隅の対角線方向に観察面を設定した。数多い礫が含まれていたが、I~IVに大別したように自然埋没である。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので大きさは東西(370)cm、南北374cmくらいである。壁はほぼ垂直に立ち上がり普通で、壁高は東が19cm、南は11cm、北は20cmである。床面はほぼ平のタタキ床で良好である。ピットは4基検出したが、甕左隣は灰だめと思われる。柱穴状のピットは12cmと浅く柱穴に特定できるものではない。住居廃絶後に掘られたピット2基は伴出遺物はない。形状から同用途が考えられるが性格は不明である。

甕は、北東隅に石組粘土甕が構築されていたが、破損は著しく袖石の一部が遺存しただけで原形を留めていない。付近に抜き取られた甕石はなく持ち去られている。焼土の厚さは7cmほどで下層も火熱で変色している。

出土した遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄滓がある。

供膳形態は土師器の壺2点(第20図1・2)、灰釉陶器の段皿1点(3)、碗2点(4・5)、貯蔵形態は土師器の小形甕2点(6・7)である。4の内外面には漆と思われる付着物がみられる。図示できなかった破片は土師器の壺類が109点、甕類が185点、須恵器の



第21図 第13号竪穴住居址実測図（1:60）

甕類が1点、灰釉陶器の碗類が5点ある。

鉄滓は2点で重さは28.9g（表3）である。

第13号竪穴住居址（第4・20・21図、写真30）

第12号竪穴住居址の南に位置する。CK-51~53、CL-50~54、CM-50~54、CN-51~53の16グリッド辺りに跨る竪穴住居址であるが、東壁と北壁の一部を検出しただけで明確なことは一切不明である。

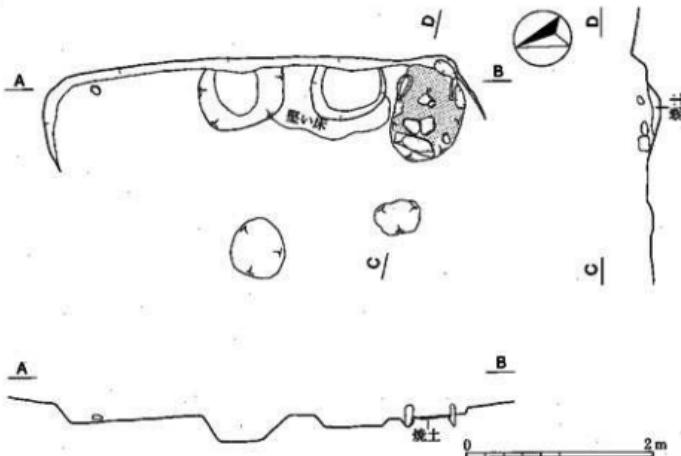
埋土の観察は、竈を確認したことにより住居址を認定した状態であり、すでに埋土は薄く充分に観察することができなかった。

竪穴住居址は、礫を包含する黒色土層中に構築されていたものである。住居を構築するにあたり礫を取り除いていたため、礫が抜かれた範囲を概ね住居址と考えたが、大きさは東西(450)cm、南北(350)cmくらいであろう。かろうじて東壁と北壁の一部を確認したが、壁高は高い所でも5cmほどである。床面はほぼ平らで部分的にタタキ床も認められるが総体的には歓弱で良くない。ピットは検出することができなかった。

竈は、東壁際の焼土が火床である。破損は著しく竈石は抜き取られており、左袖部に粘土が僅かに遺存しただけである。付近に抜き取られた竈石はなく持ち去られている。焼土の厚さは3cmほどである。竈近くから土師器の壺と甕が出土した。

出土した遺物は土師器と灰釉陶器がある。

供膳形態は土師器の壺1点（第20図8）で、竈左袖出土である。図示できなかった破片



第22図 第14号竪穴住居址実測図 (1 : 60)

は土師器の壺類が11点、壺類が40点、灰釉陶器の碗類が1点ある。

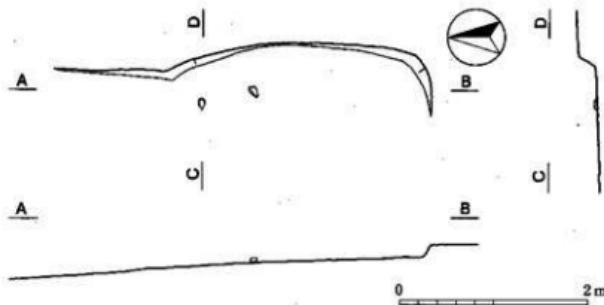
第14号竪穴住居址 (第4・20・22図、写真31・32)

第12号竪穴住居址の北に位置する。CK-58~61、CL-58~61、CM-58~61の12グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址と思われるが、この辺りは畑と畑の耕作界であり、長い年月の耕作で畑間には段差が生じていた。それは地山のローム層におよぶもので、すでに住居址の西側2/3くらいを欠損していた。残存する壁から復原を試みたが明確なことは不明である。

埋土の観察は、残存した範囲が狭く充分に観察できなかったが、逆三角堆土と三角堆土の発達がみられる自然埋没である。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたが、耕作で欠損した範囲の方が多く、東側が僅かに遺存していただけである。大きさを推測すると東西(465)cm、南北(465)cmくらいであろう。壁はほぼ垂直に立ち上がり普通で、東壁の高さは16cmである。残存する床面はほぼ平らのタタキ床で良い。ピットは4基検出したが、竪左隣は灰だめであろう。すでに耕作で床面は削られピット底部を確認した状態で性格は不明である。柱穴に特定できるものはない。

竪は、南東隅に石組粘土竪が構築されていたが、壁際の袖石と粘土が僅かに遺存していただけである。天井石1点は竪手前に落ちていたが、付近に抜き取られた竪石ではなく持ち去られている。両袖に袖石の掘り方があり右袖部は長楕円形で大きさは26×10cmで深さは



第23図 第15号竪穴住居址実測図 (1 : 60)

14cm。左袖部も長楕円形で大きさは 28×8 cmで深さは11cmである。焼土の厚さは6cmほどで下層も火熱で変色している。

出土した遺物は土師器と灰釉陶器がある。

供膳形態は土師器の碗1点(第20図9)は高台の高いものである。図示できなかった破片は土師器の壺類が9点、甕類が16点、灰釉陶器の碗類が2点ある。

第15号竪穴住居址 (第4・23図、写真33)

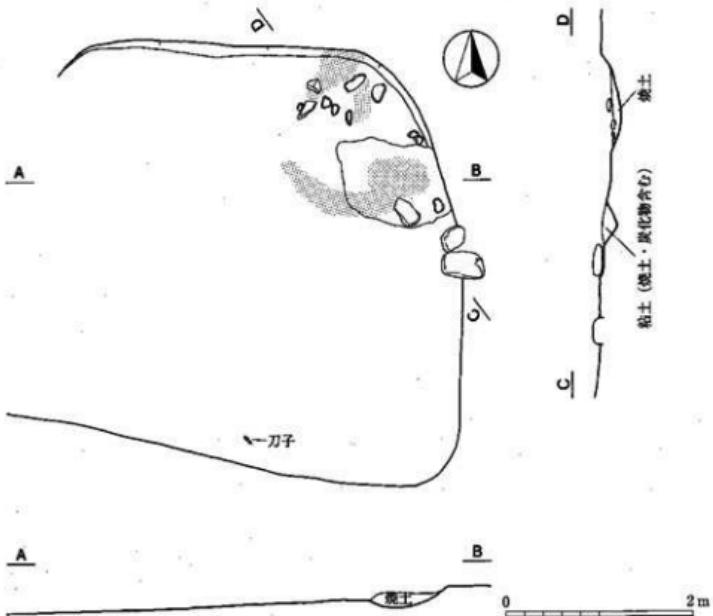
第14号竪穴住居址の北に位置する。CL-61~63、CM-61~63の6グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址と思われるが、第14号竪穴住居址同様に畑と畑の耕作界にある。長い年月の耕作で畑間には段差が生じ、それは地山のローム層におよぶもので住居址西側の1/2くらいを欠損していた。残存する壁から復原を試みたが明確なことは一切不明である。

埋土の観察は、残存した範囲が狭く充分に観察できなかったが、逆三角堆土と三角堆土の発達がみられる自然埋没である。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたが、すでに耕作で欠損した範囲が多く、東側が僅かに遺存していただけである。大きさを推測すると東西(290)cm、南北(290)cmくらいであろう。壁はほぼ垂直に立ち上がり普通で、東壁の高さは22cmである。残存する床面はほぼ平らのタタキ床で良い。ピットは検出できなかった。

竈は、欠損部に構築されていたものと思われ検出することはできなかった。竈がないことで若干の問題点を残すが、壁と床面の状態は住居址である。

出土した遺物は皆無である。



第24図 第16号竪穴住居址実測図 (1 : 60)

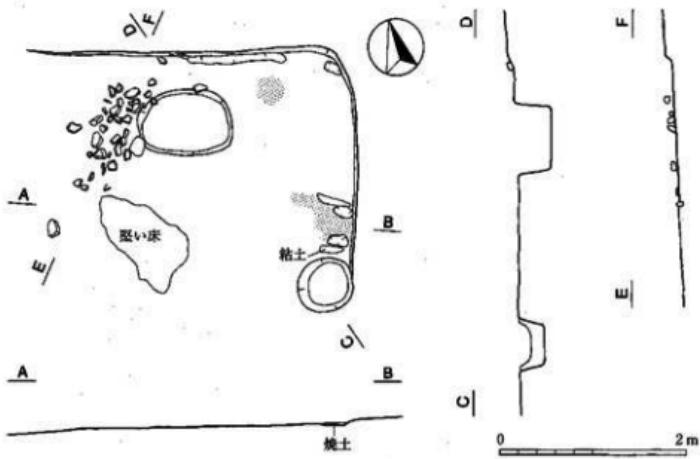
第16号竪穴住居址 (第4・12・20・24図、表3、写真34)

第3号竪穴住居址の南に位置する。DL-40~42、DM-40~42、DN-40~42の9グリッドに跨る不整隅丸方形を呈する竪穴住居址であるが、詳しいことは不明である。

埋土の観察は、東西方向に観察ベルトを設定した。数多い礫が含まれていたが逆三角堆土と三角堆土の発達がみられた自然埋没である。

竪穴住居址は、礫を包含する黒色土層中に構築されていたものである。住居を構築するにあたり礫を取り除いていたため、礫の無い範囲が概ね住居址と言える状態であったが、プランは不明瞭な点が多く壁を検出できた範囲は少ない。大きさは東西 (500) cm、南北 466cm くらいである。壁は不明瞭な所が多く良くない。壁高は南が 5 cm、北は 12 cm である。床面は総体的にみるとほぼ平らであるが、地山の礫のため凸凹が生じており良くない。ピットは検出することができなかった。

竪は、東壁の中央左寄り壁際の焼土が火床である。破損は著しく竪石は抜き取られ僅かな粘土が遺存しただけであるが、付近に抜き取られた竪石はなく持ち去られている。焼土の厚さは 6 cm ほどである。



第25図 第17号竪穴住居址実測図 (1 : 60)

北東隅からも焼土化した火床を検出したが、焼土は薄く詳しいことはわからない。

出土した遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品がある。

供膳形態は土師器の壺7点（第20図10～16）、碗1点（17）、灰釉陶器の皿1点（18）、段皿1点（19）、碗4点（20～23）、墨書き土器の破片2点（24・25）である。10・13・22は竈内出土、19は竈内出土破片が接合した。11・15・16は竈隣のピット内から出土した。13・22・24・25の墨書きは解読できない。図示できなかった破片は土師器の壺類が331点、壺類が45点、須恵器の壺類が2点、灰釉陶器の碗類が35点、壺類が1点ある。

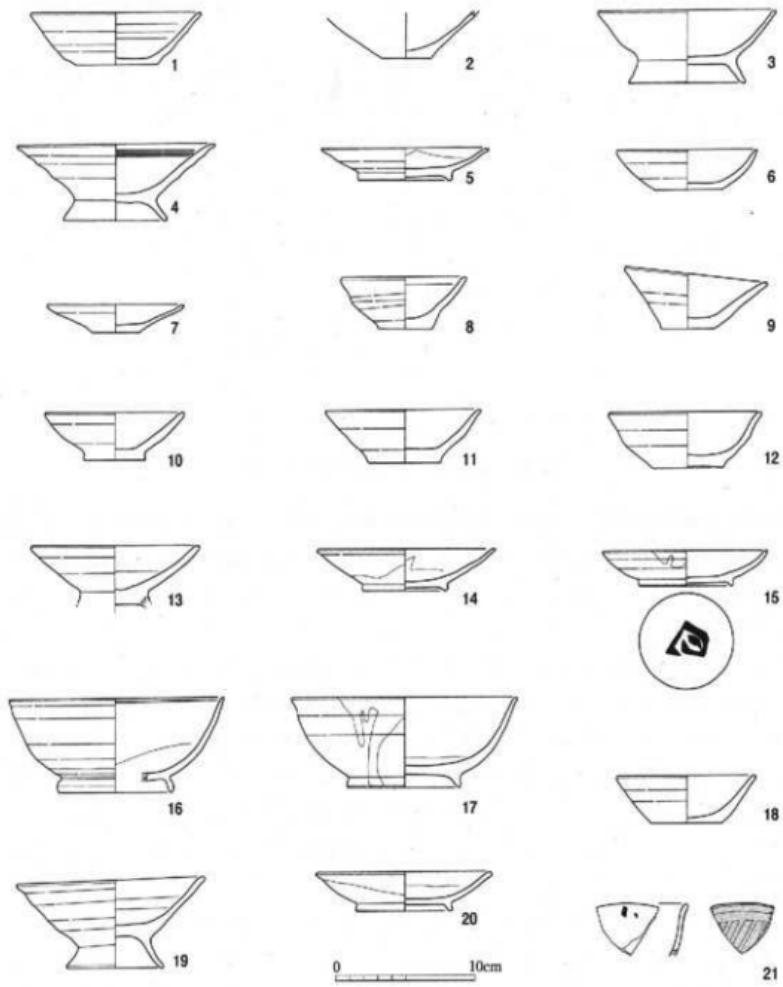
鉄製品は刀子2点（第12図7）であるが、1点は破損が著しく図示できなかった（表3）。

第17号竪穴住居址（第4・25・26図、写真35）

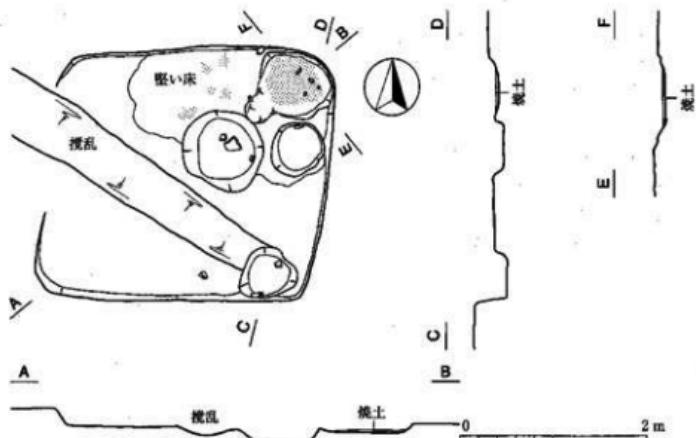
第2号竪穴住居址と第3号竪穴住居址の間に位置する。DO-44・45、DP-43～45、DQ-43～45、DR-44・45の10グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址であると思われるが、掘り込みは浅く南と西壁はすでに流失しており明確なことはわからない。

埋土の観察は、住居址の認定が遅くなり、すでにその時点では埋土の残りが薄く充分な観察はできなかったが自然埋没と思われる。

竪穴住居址は、黒褐色土からソフトローム層中に構築されていたもので、残存した東と北壁から大きさを推測すると東西（370）cm、南北（350）cmくらいであろう。壁はほぼ垂直に立ち上がり普通で、壁高は東が6cm、北は9cmと低い。床面はほぼ平らのタタキ床で



第26図 第17~21号竪穴住居址、小竪穴1、遺構外出土土器実測図（1：4）



第27図 第18号竪穴住居址実測図 (1 : 60)

良いが、西側の床面直上には礫の集石がある。礫は一つ並べて重なりはみられないが人為的なもので床に埋め込まれたような状態のものもある。周溝は北壁直下で部分的に検出したが幅は9cmで深さは深いところで10cmほどである。ピットは2基検出したが柱穴に特定できるものはない。

窓は、東壁際の焼土が火床である。破損は著しく窓石は抜き取られ僅かな粘土が両袖部に遺存しただけであるが、付近に抜き取られた窓石はなく持ち去られている。焼土両脇の壁際には袖石の掘り方があり、右袖部のものは楕円形で大きさは22×10cmで深さは5cm、左袖部も楕円形で20×12cmで深さは4cmである。焼土の厚さは6cmほどである。

窓右隣のP1は、平面が径56cmの円形で深さは28cmで壁から底はすり鉢状に焼土化した火床である。窓の火床とその形状があきらかに異なり鍛冶炉の可能性が高いものである。同様のものが第3・7・18・21号竪穴住居址にある。

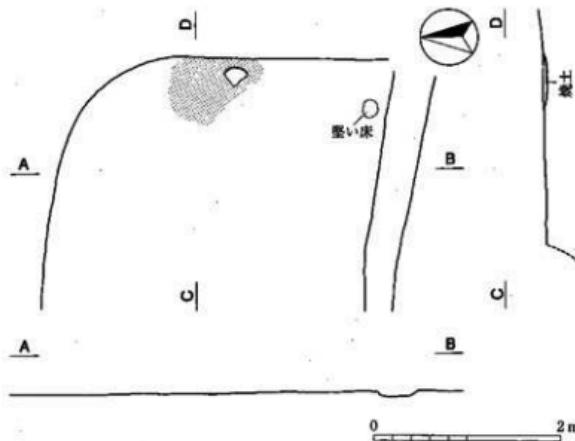
北壁際にも焼土化した火床があるが性格は不明である。焼土の厚さは2cmほどである。

出土した遺物は土師器と灰釉陶器がある。

供膳形態は土師器の壺2点(第26図1・2)、碗2点(3・4)である。3・4は高台の高いものである。図示できなかった破片は土師器の壺類が59点、甕類が3点ある。

第18号竪穴住居址 (第4・26・27図、表3、写真36)

第4号竪穴住居址の北に位置する。DP-55~57、DQ-55~57、DR-56・57の8グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址である。その多くは農道の下から検出したが輪道



第28図 第19号竪穴住居址実測図（1：60）

による搅乱が著しく詳しいことは不明である。

埋土の観察は、掘り込みが浅いうえに農道による搅乱が著しく充分に観察できなかつたが自然埋没と思われる。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので大きさは東西302cm、南北273cmである。壁は農道により欠損する所もあるがほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東が5cm、西は6cm、南は17cm、北は6cmである。床面はほぼ平らのタタキ床であるが、南東隅から北西隅にかけ幅50cm前後は農道の輪道による掘り込みで欠損している。ピットは3基検出したが、10~15cmと浅いもので柱穴に特定できるものはない。

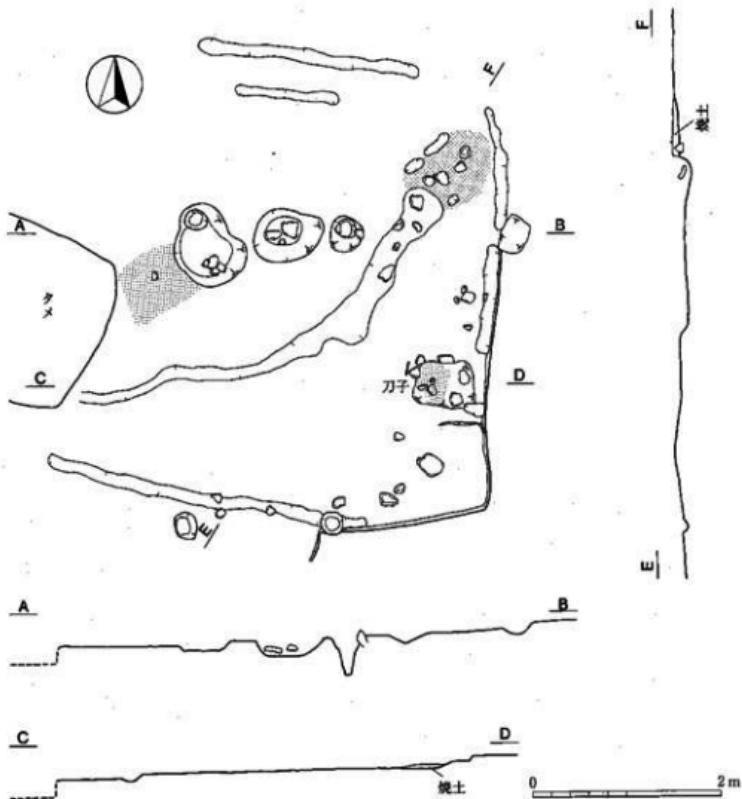
竈は、北東隅際の焼土を竈の火床と考えたが、竈石はなく付近にも散乱していない。竈内の焼土化は平面が楕円形ないしは長方形のものが多いが、本火床は浅いすり鉢状ピットの底面が円形に焼土化したものである。鍛冶炉の可能性を考えた第3・7・17・18号竪穴住居址の火床に酷似するものである。焼土の厚さは3cmほどである。

出土した遺物は土師器・灰釉陶器・石製品・鉄滓がある。

供膳形態は灰釉陶器の皿1点（第26図5）である。図示できなかった破片は土師器の壺類が16点、甕類が7点、灰釉陶器の碗類が7点ある。

石製品は砥石1点である。

鉄滓は1点で重さは12.6g（表3）である。



第29図 第20号竪穴住居址実測図 (1 : 60)

第19号竪穴住居址 (第4・26・28図、写真37)

第11号竪穴住居址の南に位置する。CS-44・45、CT-44~47、CU-44~47の10グリッドに跨るやや丸みを持つ隅丸方形を呈する竪穴住居址であると思われるが、壁が検出できなかったうえに本址より新しいロームマウンド・溝との重複により搅乱されており詳しいことは不明である。

埋土の観察はできなかった。

竪穴住居址は、礫を含む黒色土層中に構築されていたものである。床面を構築するにあたり礫を取り除いていたため、礫の少ない範囲が概ね住居址と言える状態であったが、竈の火床を手掛りに床面の検出につとめたが不明瞭な点が多い。大きさは床面が確認でき

た東西（460）cm、南北（460）cmくらいで、壁は前記の通り認定が遅くなり確認できなかった。床面は総体的にはほぼ平らであるが地山の疊により凸凹が生じている。ピットは検出できなかった。

竈は、検出した床面の広がりから東壁際に位置する焼土が火床と思われる。破損が著しく竈石は抜き取られ僅かな粘土が遺存しただけで、付近に抜き取られた竈石の散乱はなく持ち去られている。焼土の厚さは3cmほどである。

出土した遺物は土師器がある。

供膳形態は土師器の壺1点（第26図6）で、焼土内出土である。図示できなかった破片は土師器の壺類が1点だけである。

第20号竪穴住居址（第4・26・29図、表3、写真38）

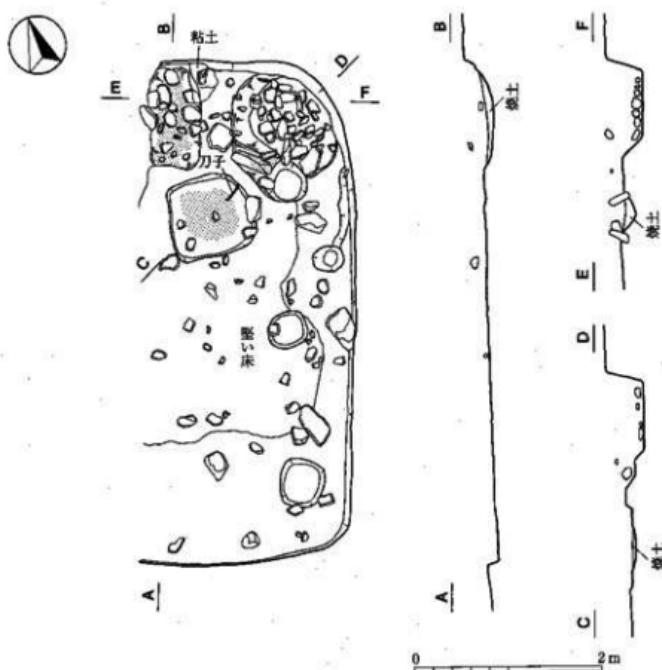
遺跡東端にあり第1号竪穴住居址の東に位置する。DY-44~46、EA-44~46、EB-44~47、EC-45・46の12グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址である。その多くは農道の下から検出したが輪道による搅乱が著しく、また、西壁辺りでは近世～現代のタメ址と重複しており、周溝を目安にプランを推測したが詳しいことは一切不明である。

埋土の観察は、掘り込みが浅いうえに農道の搅乱で充分な観察はできなかったが自然埋没と思われる。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので、残存した壁と周溝から大きさを推測すると東西（500）cm、南北（500）cmくらいであろう。壁はほぼ垂直に立ち上がり普通で、壁高は東が5cm、南は9cmである。床面はほぼ平らのタキ床であるが、南北隅から北東隅にかけ幅10~40cmくらいが農道の輪道による掘り込みで欠損している。周溝は東・南・北で部分的に検出したが、東は壁直下にあり、南と北は農道の搅乱で壁を欠損していたが、壁直下に掘られていたものと考え規模を推測した。また、北には2本の周溝がみられ内側の周溝延長線上の北東隅には竈址がある。周溝の幅は11~16cmで深さは深いところ9cmである。ピットは3基検出したが、性格は不明で柱穴に特定できるものはない。

竈は、北東隅壁際の焼土が火床である。農道の輪道下からの検出で破損は著しく竈石は残存していない。付近に竈石の散乱はなく抜き取られたのか、農道で破損したのか不明である。焼土の両脇には袖石の掘り方があり、右袖部は楕円形のものが1穴で大きさは14×9cmで深さは6cm、左袖部は楕円形のものが2穴で大きさは22×11cmで深さは6cm、33×10cmで深さは9cmである。焼土の厚さは4cmほどで下層も火熱で変色している。

焼土1は、東壁の中央右寄り壁際が焼土化した火床である。現場では竈と考えたが、竈石は残存していないうえに散乱もなく壁から10cmほど離れている。浅いすり鉢状ピットの底面がほぼ円形に焼土化したもので、鍛冶炉の可能性が高い。焼土の厚さは6cmほどであ



第30図 第21号竪穴住居址実測図 (1 : 60)

る。

焼土2は、西壁際辺りが焼土化した火床であるが性格は不明である。焼土の厚さは4cmほどである。

出土した遺物は土師器・鉄製品がある。

供膳形態は土師器の壊1点(第26図7)である。図示できなかった破片は土師器の壊類が27点、甕類が7点ある。

鉄製品は破損が著しく図示できなかった機種不明なもの1点(表3)は、現場では鉄鎌にみえたものである。

鉄滓は2点で重さは15.9g(表3)である。

第21号竪穴住居址 (第4・12・26・30図、写真39~42)

第20号竪穴住居址の南で遺跡東端に位置する。DX-42~44、DY-41~44、EA-41~

44、EB-41~44の15グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址である。1/2くらいは農道で欠損しており詳しいことは不明である。

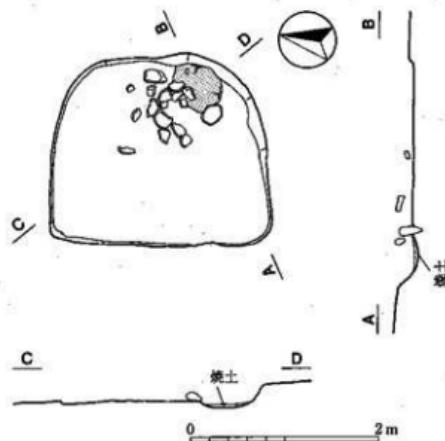
埋土の観察は、東西方向に観察ベルトを設定し、農道で切り取られた南北方向の欠損面で観察したが逆三角堆土と三角堆土の発達がみられる自然埋没である。

竪穴住居址は、地山が傾斜していたため北はローム層中に南は黒褐色土層中に構築されていたもので、残存した壁から大きさを推測すると東西(520)cm、南北537cmくらいである。壁はほぼ垂直に立ち上がり普通で、壁高は東が19cm、南は13cm、北は19cmである。床面はほぼ平らで部分的にタタキ床も認められたが普通である。周溝は東壁直下で僅かにみられたが幅は10cm前後、深さは深いところで8cmである。ピットは7~14cmと浅いものばかりで柱穴とは思えない。北東隅のピットも14cmほどと浅いが底面に握り拳大の礫が敷き詰められていた。すでに上面を農道で削り取られていたピットの底近くから八稜鏡が出土した。注目されるものであるが、農道で搅乱され詳しいことはわからない。

竈は、北壁に構築された石組粘土竈で、1/2くらいの袖石と粘土が右袖部に遺存していた。天井石はなく付近に抜き取られた竈石はなく持ち去られている。焼土の厚さは8cmほどである。

焼土1は、竈南で検出した火床である。竈址の火床とは異なり、3cmほどの浅いピット内が円形に焼土化しており鍛冶炉の可能性が高いものである。焼土の厚さは5cmほどである。

焼土2は、住居址北東で検出した火床である。焼土1同様に浅いすり鉢状のピット底面



第31図 第22号竪穴住居址実測図 (1 : 60)

が焼土化したものである。ピット2基に切られているが焼土の厚さは7cmほどである。

焼土1と焼土2は、鋳冶炉と考えてきた第3・7・17・18号竪穴住居址の火床と近いものである。

出土した遺物は土師器・灰釉陶器・綠釉陶器・青銅製品・鉄製品・鉄滓がある。

供膳形態は土師器の壺5点（第26図8～12）、碗1点（13）、灰釉陶器の皿2点（14・15）、碗2点（16・17）である。8は竈内から出土した。9は内面に13は外外面に炭化物の付着がみられる。15の高台内側の墨書きは解読できない。図示できなかった破片は土師器の壺類が499点、甕類が72点、灰釉陶器の碗類が27点、壺類が1点、綠釉陶器の碗類が1点ある。

青銅製品は八稜鏡1点（第12図9）である。

鉄製品は刀子1点（第12図8）と破損が著しく図示できなかった機種不明のもの2点（表3）であるが、内1点は鉄鎌の中子と思われるもので竈内出土である。

鉄滓は3点で重さは147.3gで、内1点は竈内出土である。

第22号竪穴住居址（第4・31図、写真43～45）

第8号竪穴住居址と第11号竪穴住居址の間に位置する。CV-56～58、CW-57・58の5グリッドに跨る不整の隅丸方形を呈する竪穴住居址である。当初は、小規模なうえに西壁の辺りは耕作の歴による搅乱で不明瞭なこともあり小竪穴と考え精査を進めた。竈を検出したことで第22号竪穴住居址とした。

埋土の観察は、東西方向に土層観察面を設定した。逆三角堆土と三角堆土の発達がみられる自然埋没である。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので大きさは東西208cm、南北237cmである。西壁と北壁はほぼ垂直に立ち上がり普通であるが、東壁と南壁はなだらかでありあまり良くない。壁高は東が19cm、西は5cm、南は8cm、北は6cmである。床面はほぼ平らでタタキ床もみられたが普通である。ピットは検出できなかった。

竈は、東壁の南東隅寄りに石組粘土竈が構築されていたが、左袖石の一部が遺存しているだけである。竈石は付近に散乱するがその数は少なく持ち去られたものがあるようである。焼土の厚さは4cmほどで下層も火熱で変色している。

出土した遺物は少なく、土師器の壺類破片1点と灰釉陶器破片1点だけである。

（2）小竪穴

検出した小竪穴は16基あるが、平安時代の遺物を伴出した小竪穴は1基だけである。

小豈穴1（第4・26・32図）

遺跡の東端で第20号豈穴住居址の北東に位置する。EC-47・48・ED-47・48グリッドで検出したが、平面形は $175 \times 91\text{cm}$ の長方形で深さは9cmと浅い。壁はロームで立ち上がりは普通で底は平である。

出土した遺物は、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器、縄文時代の土器がある。

供膳形態は土師器の壺1点（第26図18）、碗1点（19）である。図示できなかった破片は土師器の壺類が9点、甕類が26点（内22点は同個体）、須恵器の甕類が1点、灰釉陶器の碗類が1点である。なお、第10号豈穴住居址（第14図13）に本址出土破片が接合した。

図示しなかったが、性格不明のおはじき状の小石1点がある。自然石として片付けることはできないが、積極的に石器として認定することもできないものである。

縄文時代の土器小破片は1点で混入遺物であろう。

（3）遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・石器・石製品・鉄製品・鉄滓がある。

土器（第26図）

土器類はそれほど多くない。図示できたものは灰釉陶器の皿1（第26図20）、土師器の墨書き土器1点（21）は小さな破片で解読できない。図示できなかった破片は土師器の壺類が216点、甕類が160点、須恵器の壺類が4点、甕類が7点、灰釉陶器の碗類が169点、甕類が1点、綠釉陶器の碗類が1点ある。なお、詳しいことはわからないが肉眼観察では黒漆？が付着した小破片がある。

石器

石器は有孔磨製石鎌1点である。孔部分で破損しており基部側はない。

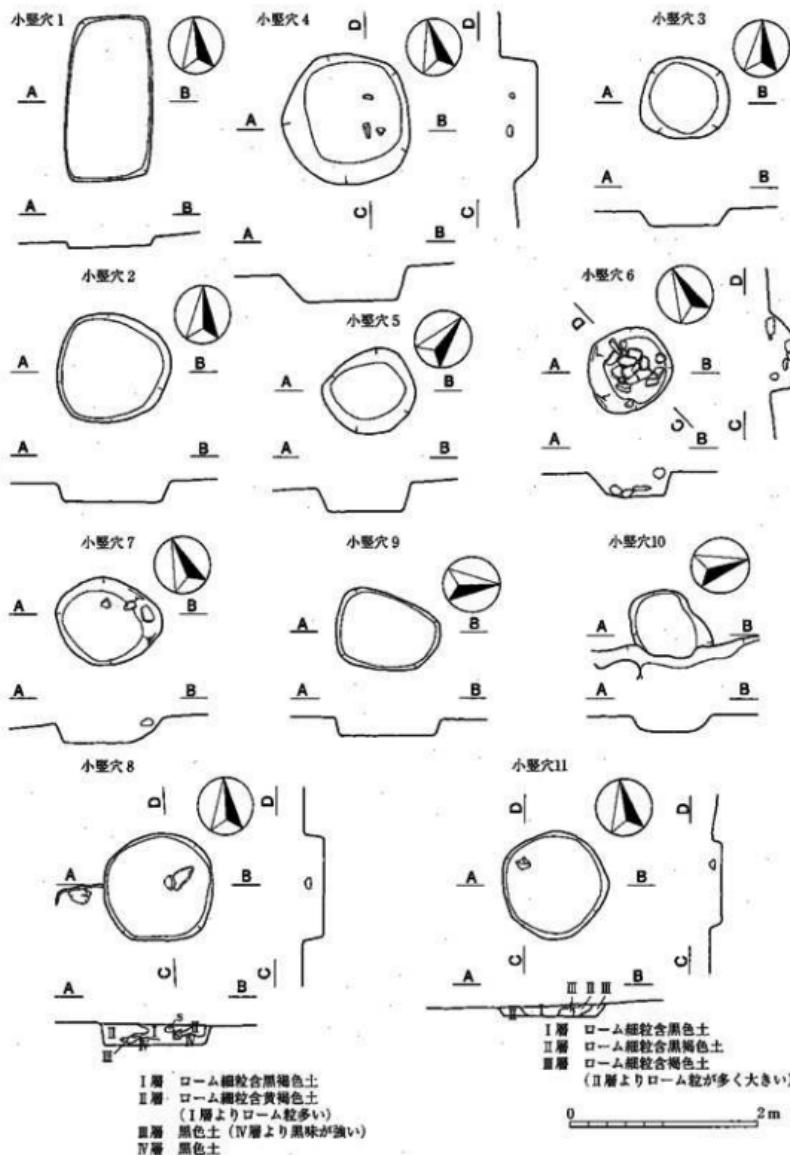
石製品

石製品は砥石2点である。

鉄製品（表3）

鉄製品は破損が著しいが刀子1点、機種不明なもの2点（表3）である。

鉄滓は3点で重さは29.9gである。



第32図 小堅穴 1 ~11実測図 (1 : 60)

4 時代不詳の小竪穴と集石

(1) 小竪穴

検出した小竪穴は16基あるが、縄文時代の遺物が出土した小竪穴14、平安時代の遺物が出土した小竪穴1以外から遺物は出土していない。したがって、帰属時期は不明である。

小竪穴2（第4・32図）

第11号竪穴住居址と第12号竪穴住居址のほぼ中間に位置する。CQ-57・58グリッドで検出したが、平面形は121×118cmの不整円形で深さは23cmである。壁はロームで立ち上がりは普通で底は平である。壁際の底直上から安山岩の小礫1点が出土した。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴3（第4・32図）

小竪穴2の南西に位置する。CO-55・CP-55グリッドで検出したが、平面形は95×90cmの円形で深さは18cmである。壁はロームで立ち上がりは緩やかで底は平である。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴4（第4・32図）

小竪穴3の南西だけで第13号竪穴住居址の東壁に隣接している。CN-53・54グリッドで検出したが、平面形は138×136cmの円形で深さは42cmである。壁は褐色土とロームで立ち上がりは緩やかで底は平である。検出面近くで安山岩の礫が出土した。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴5（第4・32図）

第12号竪穴住居址の西に位置する。CC-56グリッドで検出したが、平面形は95×88cmの梢円形で深さは31cmである。壁はロームで立ち上がりは緩やかで底は平である。検出面近くで安山岩の礫が出土した。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴6（第4・32図、写真46）

遺跡の西端で小竪穴5の北西に位置する。CA-57・58グリッドで検出したが、平面形

は98×84cmの楕円形で深さは26cmである。壁はロームで立ち上がりは緩やかで底は平である。底面には安山岩の礫が敷きつめられ壁面には貼りついた礫もある。礫の大きさ10~20cmくらいである埋土には少ないが炭化物の包含がみられたことから焼石炉であろうか。

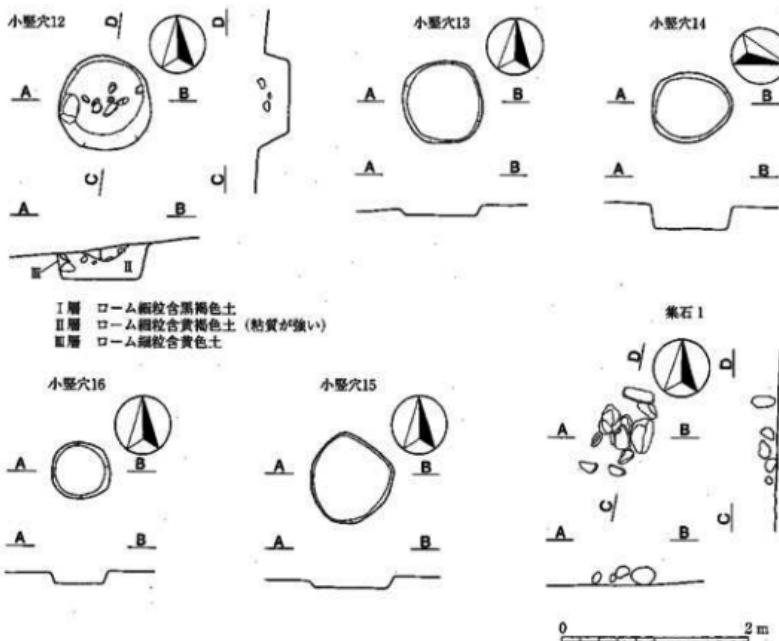
小豊穴7（第4・32図）

小豊穴6の東に位置する。CE-57グリッドで検出したが、平面形は112×97cmの楕円形で深さは28cmである。壁は褐色土とロームで立ち上がりは緩やかで底は平である。検出面と底から安山岩の礫が出土した。

出土した遺物は皆無である。

小豊穴8（第4・32図）

第6号豊穴住居址の北壁で重複している。DH-58・59、DI-58・59グリッドで検出したが、重複による新旧関係は本址が新しく第6号豊穴住居址が古い。埋土はI~IVに大別



第33図 小豊穴12~16、集石1 実測図 (1 : 60)

したように自然埋没である。平面形は $116 \times 114\text{cm}$ の円形で深さは 22cm である。壁はロームで立ち上がりはほぼ垂直で底は平である。

出土した遺物は皆無である。

小豊穴9（第4・32図）

第6号豊穴住居址の西に位置する。DF-57グリッドで検出したが耕作で搅乱されている。平面形は $112 \times 84\text{cm}$ の楕円形で深さは 17cm である。壁は褐色土とロームで立ち上がりは普通で底は平である。

出土した遺物は皆無である。

小豊穴10（第4・32図）

小豊穴9の南東で、第6号豊穴住居址の南西に位置する。DF-56・DG-56グリッドで検出したが、東壁は耕作の歎で欠損する。平面形は $(78) \times 72\text{cm}$ の楕円形で深さは 15cm である。壁はロームで立ち上がりは緩やかで底は平である。

出土した遺物は皆無である。

小豊穴11（第4・32図）

小豊穴9の北で、第6号豊穴住居址の北西に位置する。DE-61・DF-61グリッドで検出したが、埋土はI～IIIに大別したように自然埋没である。平面形は $118 \times 118\text{cm}$ の円形で深さは 9cm と浅い。壁はロームで立ち上がりは緩やかで底は平である。検出面近くで安山岩の礫が出土した。

出土した遺物は皆無である。

小豊穴12（第4・33図、写真47）

小豊穴7の北で、遺跡の北西端に位置する。CF-66・CG-66グリッドで検出したが、埋土はI・IIに別けたように自然埋没で、検出面からII層上部から礫が出土した。平面形は $100 \times 90\text{cm}$ の円形で深さは 27cm である。壁はロームで立ち上がりは良いが南壁は緩やかになり底は平である。

出土した遺物は皆無である。

小豊穴13（第4・33図）

第11号豊穴住居址の北に位置する。CU-59・60グリッドで検出したが、平面形は $94 \times 86\text{cm}$ の円形で深さは 11cm である。壁はロームで立ち上がりは緩やかで底は平である。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴15（第4・33図）

第4号竪穴住居址と第18号竪穴住居址のほぼ中間に位置する。DP-52・53、DQ-52・53グリッドで検出したが、平面形は96×76cmの不整円形で深さは12cmである。壁はロームで立ち上がりは普通で底は平である。

出土した遺物は皆無である。

小竪穴16（第4・33図）

第4号竪穴住居址と第17号竪穴住居址のほぼ中間に位置する。DP-48、DO-48グリッドで検出したが、平面形は62×60cmの円形で深さは13cmである。壁はロームで立ち上がりは緩やかで底は平である。

出土した遺物は皆無である。

（2）集石

集石1（第4・33図）

第6号竪穴住居址の北西に位置する。DE-60グリッドで検出したが、丸みを持つ安山岩の自然石12点を105×60cmの長方形に一つ並べに集石したもので重なりはみられない。伴出遺物はなく不明瞭な点が多い。

5 近・現代の遺構と遺物

（1）タメ址

タメ址2基を検出したが現代のものであり対象外とした。

（2）遺構に伴わない遺物

僅かな磁器破片が出土したが対象外とした。

V まとめ

発掘調査では、旧石器時代、縄文時代、平安時代の複合遺跡であることが明らかになった。整理期間の関係で未だ遺構・遺物の分析に手を付けることができないでいるため、現場および整理作業の折々に感じたことを記しまとめにかえたい。

現場における竪穴住居址の調査は、壁際の焼土化した火床を安易に石が抜き取られた竪と考え、壁から離れているものについては性格不明とした。平成5年度に同事業で実施した程久保遺跡（第2次）と思膳西遺跡（第3次）の発掘調査で鍛冶址の調査を経験したことにより、竪の火床と鍛冶炉の火床には違いのあることがわかつてき。その点を踏まえ本遺跡の火床をみなおすと鍛冶炉の可能性が高いものがある。しかし、遺跡はすでになくなり現場で確認することができない。調査記録や写真などから鍛冶炉の可能性を記述したが、現場における観察不足を痛感している。

平安時代の竪穴住居址22軒を調査し数多い貴重な遺物が出土したが、中でも八稜鏡と鉄製品は注目されるものであろう。これらの発見は予想をはるかに上回る成果を上げたことになるが、貴重な遺跡が一つ消え去ったことを忘れてはいけない。

八稜鏡をはじめ数多い鉄製品が出土したが、八ヶ岳西麓における八稜鏡の出土は、茅野市判ノ木山西遺跡の2点（2次的な焼成を受けたもの）に次いで3例目である。鉄製鏡先是スパラシイものであるが、開拓にはたした役割は大きかったように思う。また、鍛冶炉を伴う住居址は多く鉄製品の使用が著しかったことを窺い知ることができよう。

本遺跡は高い尾根と尾根に挟まれた低い尾根上の比較的平坦地を居住域としていた。当地方における該期の多くの集落址は、尾根南傾斜の日溜まり地形に展開し、ほぼ等高線上に住居址が並ぶ傾向がみられる。したがって本遺跡は立地に大きな違いがみられたことになるが、出土資料のあり方などを考えあわせると、八ヶ岳西麓における中心的な集落であったものと思われる。

最後に、関係者各位ならびに調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

表2 堪穴住居址・小豎穴・集石一覧表

堅穴住居址

カッコ付けの数値は推定値を示す

番号	図版	検出位置	平面形	規 模			遺構の特徴・出土遺物等
				長軸	短軸	深さ	
1	第5図	D S - 47 D T - 47 ほか	隅丸方形	467	(530)	5	耕作の跡による擾乱が著しく不明瞭、竈は新・旧2時期、新竈は北壁、旧竈は北東隅、鐵治炉？は中央と南東隅の2ヶ所、土師器、須恵器、灰釉陶器、鐵製品は機種不明、炭化材
2	第7図	D S - 43 D T - 43 ほか	隅丸方形	305	(300)	9	周溝は北壁直下、竈は北東隅、土師器、灰釉陶器、鐵製品は鐵先の優品、鐵滓
3	第8図	D M - 43 D N - 43 ほか	隅丸方形	(425)	(425)	15	埋土中に多量の焼土、竈は北東隅、焼土は鐵治炉？、北壁際と東壁際の2ヶ所と貼床下北壁際、土師器、須恵器、灰釉陶器、刀子、火打金具？、鐵滓
4	第9図	D O - 48 D P - 48 ほか	隅丸方形	372	(340)	16	竈は東壁、土師器、須恵器、灰釉陶器
5	第10図	D E - 48 D F - 48 ほか	隅丸方形	550	(550)	32	埋土中に多数の縄、北と西壁直下の一部と東壁際に周溝、新竈は北東隅、旧竈址は2ヶ所で焼土1は北東隅、焼土2は東壁際、鐵治炉？は南西隅近く、土師器（耳皿）、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、鐵製品は刀子の優品、鐵鑿、機種不明、鐵滓
6	第13図	D G - 50 D H - 50 ほか	隅丸方形	(500)	(430)	10	小豎穴8と重複本址が旧い、周溝は東と南壁直下、竈は北東隅、燒土化した火床、土師器、灰釉陶器、砥石
7	第15図	D C - 53 D D - 53 ほか	隅丸方形	395	377	13	周溝は東と北壁直下、竈は東壁、鐵治炉？は北東隅、土師器、須恵器、灰釉陶器
8	第16図	C X - 56 C Y - 56 ほか	隅丸方形	398	403	26	周溝は壁直下に全周、竈は北壁、土師器、須恵器、灰釉陶器、灰釉陶器碗転用硯、鐵製品は機種不明、古鏡
9	第17図	C V - 60 C W - 60 ほか	隅丸方形	284	306	15	第10号堅穴住居址と重複本址が新しい、竈は東壁、土師器、灰釉陶器、砥石
10	第17図	C W - 60 C X - 60 ほか	隅丸方形	393	328	34	第9号堅穴住居址と重複本址が旧い、炭化材、火災により廃絶、竈は西隅？、土師器、灰釉陶器
11	第18図	C S - 56 C T - 56 ほか	隅丸方形	364	438	25	周溝は壁直下には全周、竈は東南隅、竈左隣に焼土、土師器ミニチュア土器、灰釉陶器、鐵製品は鐵鑿、刀子、ふいごの羽口残片、砥石
12	第19図	C L - 55 C M - 55 ほか	隅丸方形	374	(370)	20	竈は北東隅、土師器、須恵器、灰釉陶器、鐵滓
13	第21図	C K - 51 C L - 50 ほか	隅丸方形	(450)	(350)	5	竈は東壁、土師器、灰釉陶器
14	第22図	C L - 58 C M - 58 ほか	隅丸方形	(465)	(465)	16	耕作で2/3くらいを欠損、竈は南東隅、土師器、灰釉陶器
15	第23図	C L - 61 C M - 61 ほか	隅丸方形	(290)	(290)	22	耕作で1/2くらいを欠損、竈は未確認（欠損部に構築？）

16	第24図	D L - 40 D M - 40 ほか	不整圓丸方形	(500)	466	12	竈は東壁、土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品は刀子
17	第25図	D O - 44 D P - 43 ほか	隅丸方形	(370)	(350)	9	北壁直下に周溝、竈は東壁、竈南隣は鍛冶炉?、北東隅部に焼土、土師器、灰釉陶器
18	第27図	D P - 55 D Q - 55 ほか	隅丸方形	302	273	17	農道による擾乱が著しい、竈は北東隅、土師器、灰釉陶器、砥石、鉄滓
19	第28図	C S - 44 C T - 44 ほか	隅丸方形	(460)	(460)		竈は東壁、土師器
20	第29図	D Y - 44 E A - 44 ほか	隅丸方形	(500)	(500)	9	農道による擾乱が著しい、周溝は東・南・北壁直下、竈は東壁、北東隅焼土は鍛冶炉?、焼土は西壁際、土師器、鉄製品は鉄錠、機種不明、鉄滓
21	第30図	D X - 42 D Y - 42 ほか	隅丸方形	537	(520)	19	農道による擾乱が著しい、竈は北壁、竈南の焼土は鍛冶炉?、土師器、灰釉陶器、綠釉陶器、青銅製品は八稜鏡、鉄製品は刀子、鉄滓
22	第31図	C V - 56 C W - 57 ほか	隅丸方形	237	208	19	竈は東壁、土師器、灰釉陶器

小堅穴

カッコ付けの数値は現存値を示す

番号	図版	検出位置	平面形	規 模			遺構の特徴・出土遺物等
				長軸	短軸	深さ	
1	第32図	E C - 47 E D - 47 ほか	長方形	175	91	9	平安時代 土師器、須恵器、灰釉陶器、おはじき状の石、繩文土器
2	第32図	C Q - 57 C Q - 58	不整円形	121	118	23	底に小砾
3	第32図	C O - 55 C P - 55	円形	95	90	18	
4	第32図	C N - 53 C N - 54	円形	138	136	42	検出面近くで砾
5	第32図	C C - 56	椭円形	95	88	31	検出面近くで砾
6	第32図	C A - 57 C A - 58	椭円形	98	84	26	焼石炉?
7	第32図	C E - 57	椭円形	112	97	28	検出面と底に砾
8	第32図	D H - 58 D I - 58 ほか	円形	116	114	22	第6号堅穴住居址と重複本址が新しい
9	第32図	D F - 57	椭円形	112	84	17	
10	第32図	D F - 56 D G - 56	椭円形	(78)	72	15	耕作の歯で東壁を欠損
11	第32図	D E - 61 D F - 61	円形	118	118	9	検出面近くで砾
12	第33図	C F - 66 C G - 66	円形	100	90	27	
13	第33図	C U - 59 C U - 60	円形	94	86	11	
14	第33図	D N - 53 D N - 54	円形	85	76	31	縄文時代 底に砾、石礫、石錐、黒曜石剥片

15	第33図	D P - 52 D Q - 52 ほか	不整円形	96	76	12	
16	第33図	D P - 48 D O - 48	円形	62	60	13	

集石

番号	図版	検出位置	平面形	規 模		遺構の特徴・出土遺物等
				長軸	短軸	
1	第33図	D E - 60	長方形	105	60	自然石12点

表3 青銅製品・鉄製品・鉄滓一覧表

青銅製品・鉄製品

カッコ付けの数値は現存値を示す

図版番号	遺構名・地点	名 称	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さ g	備 考
	1号住居址	不明	(7.0)	1.9	1.0	7.3	
第12図 1	2号住居址	鍔先	21	11.5	1.0	420	
	3号住居址	刀子	(10.0)	1.5	0.6	14.6	
	3号住居址	刀子	(5.6)	1.4	0.7	4.7	
	3号住居址	火打金具	8.3	(1.7)	0.4	11.5	
第12図 4	5号住居址	刀子	(22.5)	(1.9)	0.5	36.5	
第12図 3	5号住居址	鉄鎌	(7.0)	(1.5)	0.4	8.5	
第12図 2	5号住居址	鉄鎌	(5.3)	(3.5)	0.2	10.5	
	5号住居址	不明	1.8	0.6	0.6	0.9	筋鉢車の輪?
	5号住居址	不明	(8.0)	0.9	0.4	3.8	鉄鎌の中子?
	5号住居址	不明	(4.5)	1.1	0.7	3.7	鉄鎌の中子?
	5号住居址	不明	(5.3)	0.7	0.5	2.4	鉄鎌の中子?
	8号住居址	不明	(11.0)	1.3	1.1	18.6	鉄鎌の中子?
	8号住居址	古鏡	2.2	(0.8)	0.1	1.5	1/2を欠 解説不明*
第12図 5	11号住居址	刀子	(11.0)	1.8	0.7	16.8	
第12図 6	11号住居址	刀子	(11.7)	1.8	0.7	21.5	
	16号住居址	刀子	(7.5)	1.1	0.4	6.6	
第12図 7	16号住居址	刀子	(9.4)	1.8	0.4	15.9	
	20号住居址	鉄鎌	(1.3)	1.5	0.7	16.6	
第12図 9	21号住居址	八稜鏡	7.6	7.6	0.5	32.7	
第12図 8	21号住居址	刀子	(17.2)	2.2	0.8	26.2	
	21号住居址	不明	(3.7)	(1.1)	(1.0)	9.2	竈内出土鉄鎌の中子?
	21号住居址	不明	(2.4)	1.8	0.7	16.2	
	遺構外	刀子	(7.3)	2.5	0.9	9.2	
	遺構外	不明	(5.1)	3.9	0.4	22.4	
	遺構外	不明	(3.0)	0.9	0.9	6.6	L字状

鉄滓

図版番号	遺構名・地点	名 称	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さg	備 考
	2号住居址		3.1	2.0	1.5	5.5	
	3号住居址		3.2	2.8	2.0	19.4	貼床下層出土
	5号住居址		10.4	9.5	4.8	545	
	5号住居址		6.5	5.4	2.7	134.9	
	5号住居址		7.2	6.2	2.2	128.7	
	5号住居址		6.6	4.8	3.0	127.9	
	5号住居址		5.9	4.2	3.3	98.5	
	5号住居址		5.4	4.5	2.7	69.4	
	5号住居址		3.6	3.2	2.6	37.8	ピット出土
	5号住居址		5.3	3.4	2.4	35.2	
	5号住居址		4.7	2.6	1.7	21.5	
	5号住居址		4.2	2.1	1.4	9.5	
	5号住居址		3.0	2.2	0.7	5.4	ピット出土
	5号住居址		2.8	2.0	1.7	2.6	
	12号住居址		3.7	3.6	2.0	15.9	
	12号住居址		4.5	3.5	1.7	13.0	
	18号住居址		2.7	2.1	1.9	12.6	
	20号住居址		3.0	2.0	1.7	12.4	
	20号住居址		2.5	1.5	1.2	3.5	
	21号住居址		6.0	4.7	2.7	80.6	窓内出土
	21号住居址		5.3	4.7	2.0	35.0	
	21号住居址		4.3	3.6	2.2	31.7	
	遺構外		4.4	2.4	2.0	14.9	D T -44グリッド
	遺構外		4.0	2.9	2.7	12.4	D J -49グリッド
	遺構外		3.1	2.7	0.7	2.6	

写真図版 1

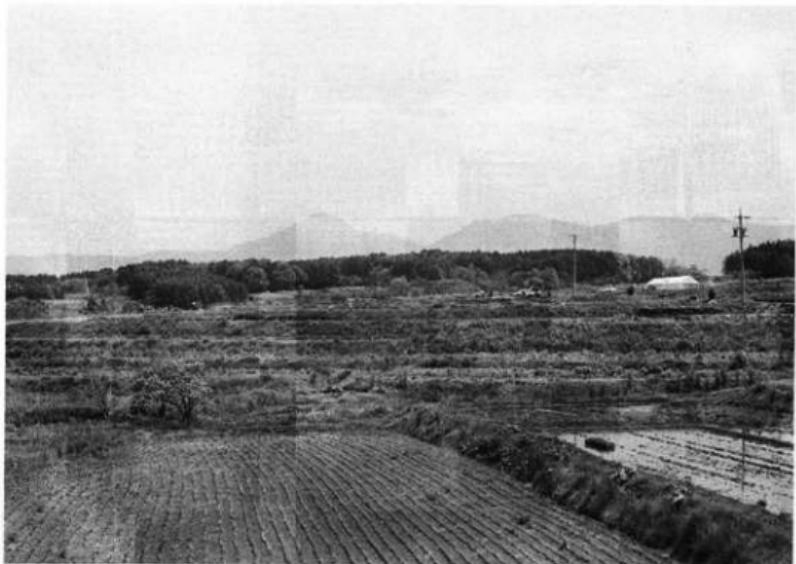


写真1　遺跡遠景（南西から）



写真2　調査区（西から）

写真図版 2



写真3 第1号竪穴住居址
(東から)



写真4 第2号竪穴住居址
(南から)

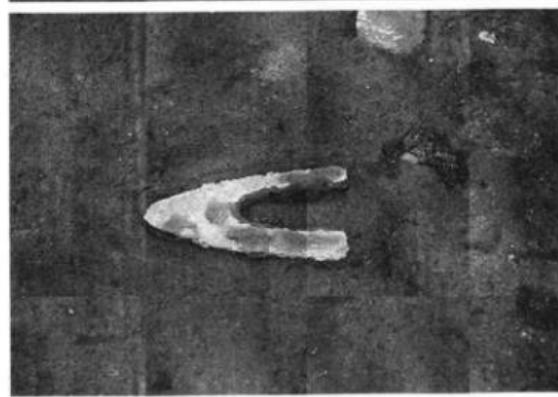


写真5 第2号竪穴住居址
鍬先出土状態
(南から)

写真図版 3



写真6 第3号竪穴住居址
(西から)



写真7 第3号竪穴住居址
竈(南西から)



写真8 第4号竪穴住居址
(西から)

写真図版 4



写真9 第4号竪穴住居址
遺物出土状態
(西から)

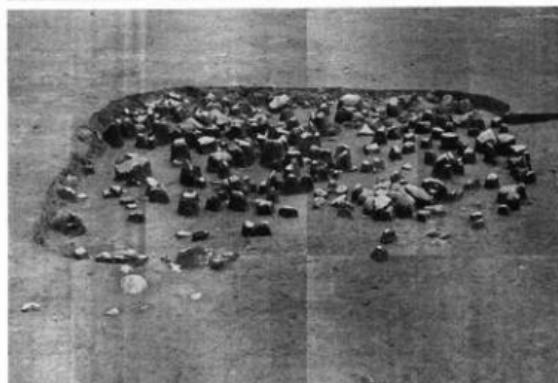


写真10 第5号竪穴住居址
遺物・疊出土状態
(西から)



写真11 第5号竪穴住居址
遺物(耳皿)出土状態

写真12 第5号竪穴住居址
竈（北東から）



写真13 第6号竪穴住居址
(北から)

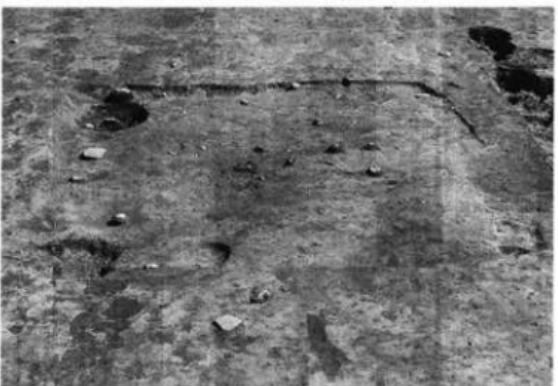
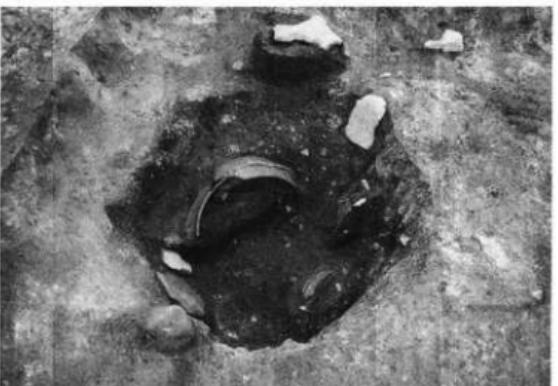


写真14 第6号竪穴住居址
遺物(羽釜)出土状態



写真図版 6

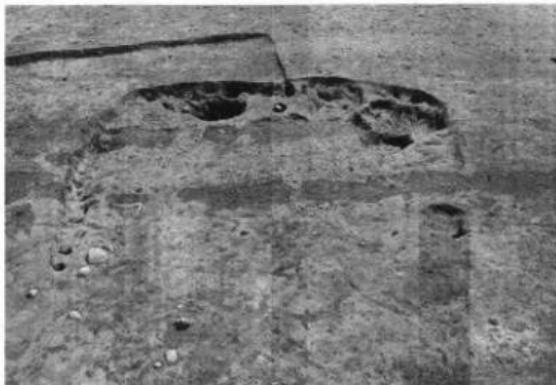


写真15 第7号竪穴住居址
(西から)



写真16 第8号竪穴住居址
遺物・疊出土状態
(南から)



写真17 第8号竪穴住居址
(南から)



写真18 第8号堅穴住居址
竈（西から）

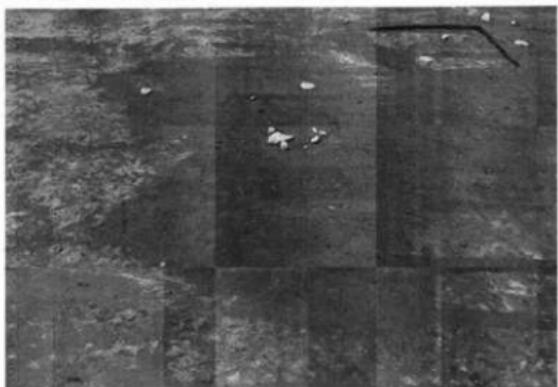


写真19 第9・10号堅穴住
居址検出状態
(東から)



写真20 第9・10号堅穴住
居址（東から）
下 第10号堅穴住居址
炭化材出土状態

写真図版 8



写真21 第9・10号竪穴住居址
(西から)

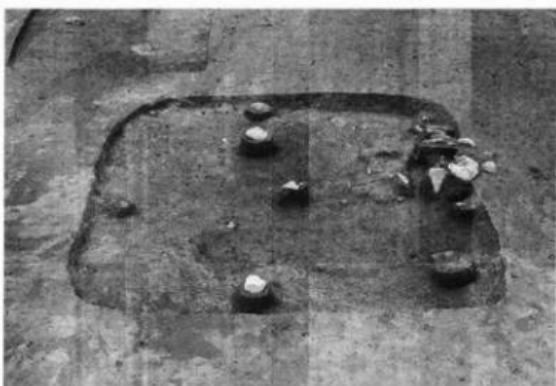


写真22 第9号竪穴住居址
(南から)



写真23 第9号竪穴住居址
竈 (西から)

写真24 第11号竪穴住居址
遺物・礫出土状態
(西から)



写真25 第11号竪穴住居址
(西から)

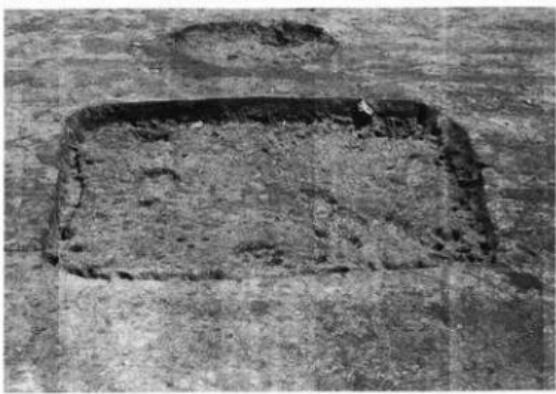


写真26 第11号竪穴住居址
竈 (南から)



写真図版10

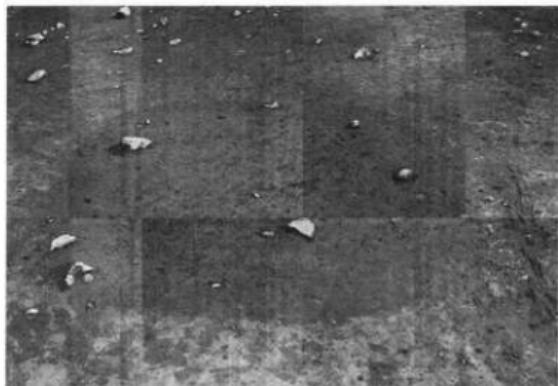


写真27 第12号竪穴住居址
検出状態（北から）



写真28 第12号竪穴住居址
(西から)



写真29 第12号竪穴住居址
窓（南から）

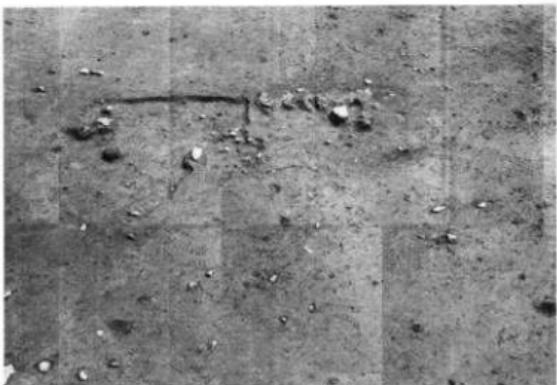


写真30 第13号竪穴住居址
(南西から)



写真31 第14号竪穴住居址
(西から)



写真32 第14号竪穴住居址
竈 (西から)

写真図版12



写真33 第15号竪穴住居址
(西から)



写真34 第16号竪穴住居址
(西から)

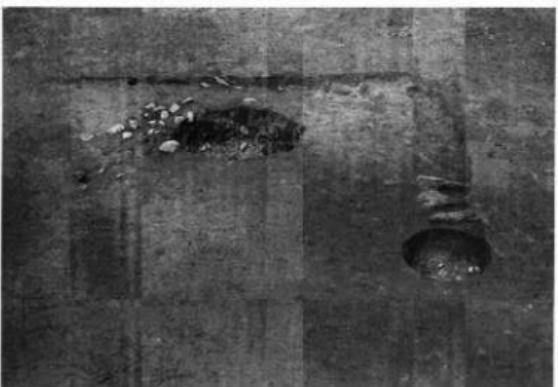


写真35 第17号竪穴住居址
(南から)

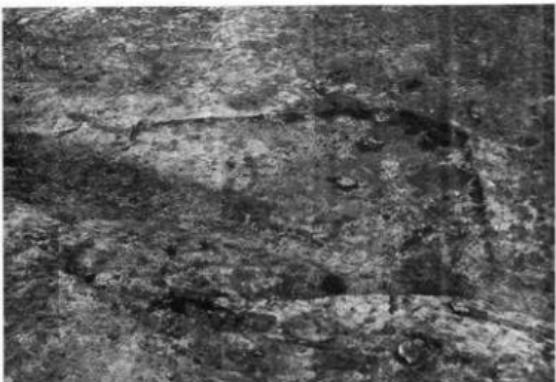


写真36 第18号竪穴住居址
(南から)



写真37 第19号竪穴住居址
(北東から)

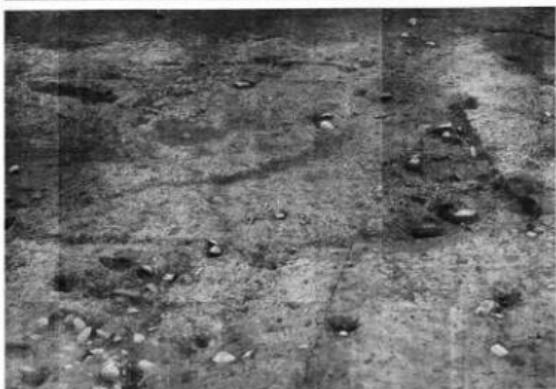


写真38 第20号竪穴住居址
(南から)

写真図版14



写真39 第21号竪穴住居址
遺物・灘出土状態
(南から)



写真40 第21号竪穴住居址
遺物（八稜鏡）出土
状態



写真41 第21号竪穴住居址
灘出土状態
(南西から)



写真42 第21号竪穴住居址
竈 (南から)



写真43 第22号竪穴住居址
遺物・爨出土状態
(南から)



写真44 第22号竪穴住居址
(南から)

写真図版16



写真45 第22号竪穴住居址
甌（西から）



写真46 小竪穴6（南から）



写真47 小竪穴12（南から）

報告書抄録

ふりがな	うらながみねいせき
書名	裏長峰遺跡
副書名	平成4年度 県営圃場整備事業恩前地区に先立つ緊急発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	原村の埋蔵文化財
シリーズ番号	29
編著者名	平出一治
編集機関	原村教育委員会
所在地	〒391-01 長野県諏訪郡原村6549番地1 TEL 0266-79-2111
発行年月日	西暦 1995年03月

所収遺跡	所在地	コード		北緯度分秒	東経度分秒	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
裏長峰	長野県諏訪郡 原村柏木	3637	14	35度 58分 9秒	138度 13分 18秒	19920501 19920907	6.593	平成4年度 県営圃場整備事業恩前地区

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
裏長峰	集落跡	旧石器時代 縄文時代 早期 中期 平安時代 後期	小堅穴 堅穴住居址 小堅穴	1基 22軒 1基	旧石器時代 ナイフ形石器 縄文時代 土器、石器 平安時代 土師器、須恵器片、灰釉陶器、綠釉陶器片、八稜鏡、鉄製品、砥石など 時代不詳 近・現代	平安時代の住居址を22軒検出したが、八稜鏡をはじめ鉄製品などの出土は注目されるものがある。遺跡は、高い尾根と尾根に挟まれた低い尾根上を居住域に選択し、從来考えられていた南斜面の日溜まりとは立地が異なり、検出した住居址数と出土遺物のありかたから、当地方における中心的な集落跡であったことが容易に考えられる。

原村の埋蔵文化財29

裏長峰遺跡

平成4年度 県営圃場整備事業恩前地区に先立つ緊急発掘調査報告書

発行日 平成7年3月

発行 原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷所 日本ハイコム株式会社

